

アーザードのアブル・ファズル伝について(三)

近藤 治

皇帝のアフマドナガル開城作戦

アクバルのところに皇子ダーニヤールとバハードゥル・ハーンの事件の報告が届いた。[原注：アブル・ファズルも書簡を送っていたようだ。皇子は少年のような振舞をしています、これではアフマドナガルに対する戦略が駄目になってしまいます、アーシール城塞の攻略は皇帝がお望みならたちどころに準備できます、と]。皇子宛てに次のような勅令が発せられた。アフマドナガルへ向かって進軍せよ、バハードゥル・ハーンが伺候しなかったのは反逆心によるものではない、この件に関し余は了解している、と。皇子は進発した。一方、皇帝の方も前進した。バハードゥル・ハーンは息子のカビール・ハーン(Kabir Khan)を何人かの貴顕たちとともに皇帝のもとに差し向け、豪華な献上品を送り届けた。しかしながら貴顕たちの往来があつたり度重なる督励を受けたにもかかわらず、[バハードゥル・ハーン自身は] 伺候しなかった。止むなく軍隊の出動命令が下され、またアブル・ファズルのもとには次のような勅令が届けられた。軍隊の統率はミルザー・シャー・ルフに任せてブルハーンプルに来たるべし。もしバハードゥル・ハーンが忠告を聞き入れて同行するならば、これまでの罪を赦すとの吉報を伝えて彼とともに来たれ。それができない場合、ただちに伺候して指示を仰ぐべし、と⁽¹⁾。

アブル・ファズルがブルハーンプルの近くに到着すると、バハードゥル・ハーンが会いにやってきた。彼は皇帝の忠告を聞き入れて同行の途についた。しかし再び自分の宮殿の方に向かって帰って行った。そしてつじつまの合わない返答を寄越してきた。アブル・ファズルは勅令の命ずる通り前進した。ブルハーンプルでは新年祭(nau-roz)⁽²⁾の祝賀が盛大に行われ

ていた。夜になると美しく着飾った女たちが舞踏し、歌い手たちは熱気を盛り上げていた。満天の星が輝く月夜の春であった。花いっぱいのお花園がそれらと張り合っていた。幸運の時(アクバルとの再会の時)が至り、アブル・ファズルは宮殿に到着して額ずいた。アクバルの心に生じた思いやりの気持ちは、この時にアブル・ファズルが詠んだ次の詩句から推察できよう。

めでたい一夜は月光を浴びて心地よく

ついに陛下と種種^{くさくさ}について語るべき時は到りぬ⁽³⁾

アブル・ファズルは感激して、いつまでも額ずいたままその場にいた。ハーン・アーザム(Khān A'zam)、シャイフ・ファリード・バフシー・ベーギー(Shaikh Farīd Bakhshī Begī)それにアブル・ファズルに対し、アーシール領地(jāgīr-i Āsir)を(479)を包囲せよ、そして塹壕を付設せよとの勅命が下された。ただちに実行に移された。シャイフ・ファリードは自分の配下の軍勢が少なく敵軍が多数であることを遠謀して、3コース(インド里)進軍したところで停止した。けれども大志を抱く人々〔原注：ハーン・アーザムは多分にムラードの如くであった〕は、それに不満であった。皇帝は不機嫌になった。アブル・ファズルが皇帝の御前に伺候して真実を聞かされると、鬱憤が晴れた。アブル・ファズルはこの日、官位四千位に叙され、ハーンデーシュ州の統治を任された。彼はあちこちで兵士たちを集めた。ある方面へは弟のシャイフ・アブル・バルカート(Shaikh Abu'l-Barkāt)を多くの賢者たちとともに派遣し、別の方面には息子のシャイフ・アブドゥルラフマーンを派遣した。神の信者たちの勇気によって、さしたる時を移さぬうちに、反抗者たちは首根っこをすっかり押さえつけられた。多くの人々は忠誠によって安全の道を手に入れた。軍隊は柔順になった。土豪(zamīndār)たちの友好が取りつけられ、彼らは銘銘の所領を維持した。

アブル・ファズルは皇帝の恩顧と信頼、並びに彼自身の能力と手立ての巧みさによって、並々ならぬ皇帝の知遇を得ていた。その結果、彼の手になる種々の方策および書面の投げ縄によって、各地の有力者(hakim)たちは引き寄せられて宮廷に伺候することを余儀なくされた。彼の弟と息子はハーンデーシュ国で大変な苦勞をしていた。皇帝はアブル・ファズルを官位四千位に叙して栄光を授けた。ラージー・アリー・ハーン(Rājī 'Alī

Khān)⁽⁴⁾の孫息子でありアブル・ファズルの甥であったサフダル・ハーン(Şafdar Khān 彼の母親はアブル・ファズルの姉)は、要請を受けてアーグラから参上して皇帝に伺候し、官位一千位の恩賞を受けた。このことによって、ハーンデーシュ王家(ファールーキー朝)の王子であった彼の訓戒は国中に良好な効果をもたらすものとなった。[原注：アブル・ファズルの末期にはジャーハングールと大きな関わりがある。『アクバル・ナーマ』を熟読すれば、彼の心理状態があちこちで述べられていることがわかる。この点に関し、私はただその事実を翻訳して紹介しているだけである。ここに取り上げている難儀な事柄は、アブル・ファズル自身が書いていることである]。

この年の帝国内における数々の事件は、上の皇子(サリーム、後のジャーハングール)の不品行であった。帝国のこの若苗はウダイプルの王を処罰するために遣わされた。彼は怠情と飲酒と悪仲間を友として、しばらくの間アジュメールで過ごした。ついでウダイプルへ突然出かけていった。当地の王はウダイプル城から抜け出して各地を経巡り、各地の集落を略奪した。サリームはマードゥー・シング(Madhū Singh)に軍隊を与えて派遣した。ウダイプルの王は山中に逃げ込むかと思えば、一転、引き返してきたばかりの軍隊に急襲をかけた。皇軍の将官が支援したが、どうすることもできず、失敗して戻ってきた。このような勤仕振りは気品をもって任務を遂行するという観点が欠落していた。サリームは近侍者たちの言いなりになり、パンジャブに移って願望を叶えようと決心した。突如としてベンガル地方のアフガン人たちの反乱の騒ぎが立ち上がった。ラージャ・マーン・シング(Raja Mān Singh)は彼の地に至る道を示してやった。サリームは〔ウダイプルへの〕遠征を完遂しないうちに、〔ベンガルのアフガン人鎮圧に〕飛び出していった。彼はアーグラから4コース上流に向かい、そこからヤムナー川を下っていった。皇太妃マリヤム・マカーニー(Maryam Makānī サリームの祖母)への挨拶をしに行くことさえしなかった。皇太妃は彼のこうした無作法に傷ついた。それでもサリームに愛情をもっていたが故に、彼女は道中往来の幸運を願って自ら見送りに出た。皇太妃が見送りに来たとの知らせを受けて、サリームはシカールガー

(Shikārgah アーグラのやや上流にあるヤムナー川の乗船場)から乗船した。そして直ちに水路によって前進した。皇太妃は失望して引き返した。サリームはイラハーバードに到着すると、人々の有する領地(jāgīr)を没収した。ビハール地方の税収は300万ルピー以上あったが、それを我がものとし皇帝に成り済した。皇帝アクバルの愛情は限りなかった。あれこれ語る人たちは本当のこと以上に尾鰭をつけて口にした。(480)また筆を執る人たちは上奏文を送り届けて打ち明けた。だが父帝のところには一つとして真実の知らせは届かなかった。父帝は勅令を送り届けて、皇子に事情を確かめてみた。そうすると、次のような内容の献身ぶりを伝える長たらしい作り話が伝えられてきた。私は何ら罪を犯しておりません、御前に伺候いたします、と。

その間にもアブル・ファズルは業務を遂行していた。彼はバハードゥル・ハーンおよびその武将たちに対して何通もの書簡を書き、その効果があちこちで多少現れていた。ある場合には皇子ダーニヤールに代わって書簡を書いた。彼はラール・バグ(La'l Baghブルハンプル内の庭園、紅玉園の意)にやってきて一息ついた。この庭園の花壇造りはアブル・ファズルに任された。彼は遅くまで虚心坦懐に感謝の祈りを捧げつづけた。幸運の扉が開かれた。対句(bait)。

いずこに御座^{おわ}そうと主上の館は我が安息所

神のみぞ知る、今宵の月のいづこより出でいずこに去るかを⁽⁵⁾

アーシール城塞征圧

アーシール城塞〔原注：アーシール(āsīr)は、さる言語で「勇気ある偉人」や「勝利した勇士」を意味するアーサー・アーヒール(āsa-ahīr)に由来する。無数の財宝がこの城塞の頑丈な土台のなかに埋め込まれ、この世から消え失せてしまった。〕は山上にある巨大にして頑丈な城塞である⁽⁶⁾。堅固さ並びに高所に位置する点で、これに匹敵する城塞はない。山の中腹の北面にマリーー城塞があり、かの並ぶものなき本丸のアーシール城塞に

至ろうとすれば、ここを通過しなくてはならない。マーリー城塞のさらに北側には曲輪^{くるわ}があって、それには低く築き上げた塁壁^{がけ}がめぐらされていた。その他のところは山の切り立った崖が囲壁をなしていた。南側には高い山がそびえていた。カルダ(Karda)山である。この山に続く丘陵はサーパン(Sapan)丘陵と呼ばれている。敵側は至る所に大砲と兵士を配して守りを固めていた。思慮深さのない者には、この城塞を抜くことは不可能であると思われた。皇軍の糧食は不足がちで、市場は遠く、餓死状態で誰も彼も意気消沈しつつあった。しかも城塞の守備陣営側は、金銀をまき散らすことによって近辺の人々を甘言でなだめていた。

皇軍の指揮官たちは銘銘勝手に塹壕から攻撃をかけていた。しかしながら敵に何らの効果を与えることはなかった。アブル・ファズルは、ある山あいの谷間に間道があり、それによって突如として曲輪の塁壁の下に至ることが可能であることを発見した。彼は皇帝に上奏して許可をえた。そして包囲作戦に携っていた武将たち全員を集め、彼らから次のような内容の承諾をえた。「しかじかの時に襲撃をかけることとする。触れ太鼓とトランペットの音が轟きわたれば、貴殿たちも一斉に触れ太鼓を叩きながら突撃されよ」と。有無をいうことなく全員が承諾した。だが、かなりの者たちはこの作戦を非現実的な夢物語と解していた。

雨の降り続く漆黒の暗夜のことであつた。アブル・ファズルは自ら側近兵士(khassagī-sipah)の精鋭部隊を編成して、一步一步サーパン丘陵を進んでいった。真夜中過ぎのことであつた。先頭の軍団^{ぐだん}が件の間道を通してマーリー城塞の(481)城門を破壊した。大胆不敵な多くの兵士たちが城塞内になだれ込んでいき、触れ太鼓を叩きトランペットを吹き鳴らしはじめた。アブル・ファズルはこれを耳にするやいなや自ら突進した。夜が明けはじめころになって全員が打ち揃った。彼は別の方角の塁壁に丈夫なロープを何本も投げ入れ、真先に自分が飛び込んでいった。次いで猛者たちは蟻の行列となって前身した。間もなく敵は混乱して散り散りになった。アブル・ファズルはアーシール城塞に向かって進んだ。マーリー城塞は占拠された。この城塞が陥落したため、バハードゥル・ハーンの戦意は消沈した。皇子ダーニヤールとハーニ・ハーナーンがアフマドナガルを征服し

た、との知らせがバハードゥル・ハーンのもとに届いた。とりわけ城塞内で疫病が蔓延し、穀物の備蓄がすっかり台無しになった。その結果、人々は〔戦闘用の〕動物のことまで構っておれなくなった。兵士も将官もすべての者の気持ちが離ればなれになっていった。彼らはある程度の間まではあれこれ議論していたが、ついには困惑し切ってアーシール城塞を明け渡してしまった。ヒジュラ暦1009年、西暦1601年〔1月6日〕のことであった。

バハードゥル・ハーンは、グジャラート人の宮廷奴隸(ghulam)のなかから一人の賢明な老人を選び、アーシール城塞の鍵をすべてこの人物に委ねていた。彼は〔自分の仕えていたグジャラートの〕国王が失墜した後、ハーンデーシュに落ちのびていた。彼は当時盲人になっていた。彼には年若い息子たちがいた。見張り用の稜堡は一つまた一つと〔ムガル軍に〕引き渡されていった。彼はアーシール城塞が征圧されたという知らせを聞かぬや否や、自らの命を神に委ねてしまった。彼の息子たちの気丈夫さを見よ。彼らは父の死を聞くと、次のように語った。「今や我が王国の運は尽きた。生きていくことは恥知らずなことだ」。こう言って阿片を呑み込み命を断った。

ナーシクの人々が〔ムガル朝の〕保護を求めていた⁽⁷⁾。しかしながら貴顕たちが彼らの要求を無視したために、彼らは勢いづいて混乱が生じた。事態は深刻になった。ハーニ・ハーナーンはアフマドナガル〔の統治権掌握〕とともに立派な恩賜の長衣(khil'at)、特別の馬、それに旗幟と触れ太鼓の栄誉を授けられ、ナーシクに派遣された。かの地では、アクバルの幸運が征服のための魔法の力を発揮しつつあった。丁度そうした時に、〔アーグラから〕好意的な人々の嘆願書並びに皇太妃マリヤム・マカーニーの書簡が届いた。その書簡は、サリームが公然と謀叛したことを伝えていた。アクバルはすべての征服事業をそのままの状態で停止した。そして貴顕たちにあれこれの任務を託して、アーグラへ向け出発した。

ナーシクの事態は重大化しはじめた。そのことについてアブル・ファズルのところに勅令が届いた。それには、アフマドナガルの方に行き、ハーニ・ハーナーンとともに責務を果たすようにと認められていた。彼はびっ

くりした。そこで、ブルハーンプルにおいて多くの勇士たちを集めた。ナーシクの城塞と反抗者たちを壊滅する必要があった。言い逃れしている者どもが職務についていることは、誰も知っていない。彼ら〔原注：すなわちハーニ・ハーナーンの支持者たち〕は皇帝の意向を台無しにしたり、あるいは現実の状況に目をつむっているのであった。ハーニ・ハーナーンの擁護⁽⁸⁾は限度を越えていた。その結果、アブル・ファズル⁽⁹⁾はブルハーンプルからの出陣を求められることとなった。そこで彼は〔自分の息子の〕アブドゥルラフマーンに出征を命じ、〔自分に代わって息子に〕命令の履行を果させた。息子が任地に到着すると、ハーニ・ハーナーンはある時は彼と話し合いをし、ある時は誰かを処罰し、ある時はデカン人の有力者らしい人物に訓戒を与えていた。息子は心中困惑した。しかしながら息子は、皇帝の命令がこのようにして実行されているのだと思い込んだ。ハーニ・ハーナーンの本音はそういうところにあるようであった。アブル・ファズルの心中、我慢は山のように膨張し、意気込みは海のように(482)うねり立った。この時も彼は皇帝の命令の履行を自分の責務と考え、時節の到来を待っていた。

昔は不思議な事柄が起こったり、驚嘆すべき偉大な学者がいたりしたものである。信仰心の厚い宗教家に対しても、時代そのものがそのような尋常でない不思議な事柄を施してやることもある。かの2人の僚友(アブル・ファズルとハーニ・ハーナーン)の間で交わされた書簡を見れば、まるで恋人同士の手紙であるかのように見える。だがこの老婆(ナーシクを中心とするバグラナ王国問題)をめぐる2人の間があのように〔冷やかなもの〕なってしまった時、事態はすっかりこじれてしまい、その結果〔以前の友好的な関係の〕すべては忘れ去られてしまったのだ―アーザード⁽¹⁰⁾。

アブル・ファズルも彼の息子も、招喚があったにもかかわらずアクバルの帝国内に踏み止まり、彼らを目撃した人々には信じられないような勇猛な突撃や大胆な策略によって、任務の遂行を行っていた。

『アクバル・ナーマ』の治世第36年の記述の末尾のところに記されている、さる箇所の叙述が人々の注目を引いている。そこには次のように書かれている。アブル・ファズルは知的な職務(kar-i agah)の才能に恵まれ、

どのような勤仕にも従事したが、そうした勤仕は彼の知的容量の4分の1の力でなされていた、と⁽¹¹⁾。

『アクバル・ナーマ』の筆者アブル・ファズルはナーシクに派遣され、その途中で皇子ダーニヤールに勤仕することとなった。皇子が自分のところに伺候するようにとの希望をアブル・ファズルに伝えてきたからである。彼もそれを承諾した。皇子が率いているのは皇帝の遠征隊であって、その重責をアブル・ファズルに託そうと望んでいたのだ。アブル・ファズルは次のように返答した。「殿下のご意向を拒むものではございません。しかしながら殿下はその職務〔がいかに重大なものであるか〕について何らお触れになってはおりません。そうした重大な事柄では、すでにいくつかの貪欲で物惜しみする眼〔をもった者ども〕に任されたものがあります。このような無思慮と見通しなさの喧騒のなかで、どうして職務に就くことができましょうか」と。ダーニヤールはとどの詰まり、理解の程を示してやった。職務任命者としての皇子自身が〔遠征隊指揮の〕重責を引き受けることとし、アブル・ファズルに馬と長衣を賜与してかの地ナーシクに派遣した。1日の旅程を終えたアブル・ファズルの宿営地に、ダーニヤールは自らの栄誉を進めてきた。そしてアブル・ファズルに、くびれた形をした特別の刀と著名な軍象とを賜与して厚意の程を示した⁽¹²⁾。

ムウタマド・ハーン(Mu'tamad Khān)は『イクバル・ナーマ』(*Iqbāl-nāma*)⁽¹³⁾のなかで次のように述べている。ヒジュラ暦1009年西暦1601年に、アブル・ファズルに対して20隻の象と象積載用小型白砲、それに10頭の高級馬の褒賞があった。翌ヒジュラ暦1010年に、1頭の特別馬が下賜された。それとともに息子のアブドゥルラフマーンに1頭の馬が下賜され、さらに20頭の馬が追加して下賜された。また弟のシャイフ・アブル・ハイルに与えるようにといって1頭の馬が届けられた。この年には5万ルピーが褒賞金としてアブル・ファズルに与えられた。こうしてあれこれの稀代の褒賞が用意されて、ひっきりなしに下賜されていた。この年、アブル・ファズルは官位五千位(皇族以外としては最高官位)を賜った。約言すればざっと3年の間、アブル・ファズルはこのように一方の手には剣と知恵を握り、もう一方の手には紙とペンを持ってデカン地方で過ごしていた。ヒ

ジュラ暦1010年のラマザーン月(1602年2月13日-3月14日)に、デカンの地において『アクバル・ナーマ』の第3巻は完結を見た。そしてこの書の終結は、著者アブル・ファズルの終焉でもあった。

このアリストテレス(アブル・ファズルをさす)は、自分にとってのアレキサンドロス(アクバルをさす)の心に次のことを刻み込んでいた。すなわち彼は皇帝の有する神聖な本質(zāt-e qudsī)に対して願かけをしている、と。これは本当のことであった。アブル・ファズルは、あの方(アクバル)に対する善意と好意と献身は自分の信仰(dīn)であり規範(aḥkām)である故、皇帝のお言葉があれば躊躇することなく恩寵をお願い申し上げようとよく公言したり、あるいは告白したりしていた。アブル・ファズルは貴顕たちや皇子たちに対してさえ関心を抱くことはなく、このようにひたすら皇帝にだけ関心を向けていた。このためアクバルの心中には、次のような考えが根付いていた。皇子たち、とりわけサリームはアブル・ファズルが自分の陰口を叩く者であると思い込み、彼に不快感を抱いているに違いない、と。アクバルはデカン遠征から帰還して、サリームとの間の見かけ上の状態は(483)改善した。ヒジュラ暦1011年西暦1602年に、サリームは再び常軌を逸してしまった。そしてそれがすっかりこじれてしまったので、アクバルは困惑した。こういう考えもあった。つまり、有望な皇子を帝国の皇太子と見なして、貴顕たちをそれに必要な画策に就かせようとする考えである。マーン・シング(Maṇ Singh アクバルの重臣、1614年没)の妹はサリームのもとに嫁し、彼女の腹から皇子フスロー (Khusrau サリームの長子、1587-1622)が生まれていた。ハーン・アーザムの娘はフスローのもとに嫁していた。ともかくも皇帝はアブル・ファズルに書簡を送り、遠征の業務は息子のアブドルラフマーンに任せ汝自身はその地から退去せよ、と伝えた。アブル・ファズルはこれに対してこの上ない満足感と和やかな気持ちを込めて上奏文を書き送り、神の恩寵と陛下の幸運のおかげで何ら不安はございません、それがし承知仕りました、と伝えた。

アブル・ファズル謀殺

かくしてアブル・ファズルはアフマドナガルでアブドゥルラフマーンに遠征業務を説明し、軍隊と補給物資をその地に残した。そして自分自身はそこを離れ、必要最小限度の兵士を率いて出発した。サリームはアブル・ファズルに強い不快感を抱いていた。もしもアブル・ファズルが皇帝のもとに帰還すれば、父帝の怒りは一層増大し、あちこちのラージャー (rāja ヒンドゥー教徒の重臣) たちや將軍たちと企んで、自分の〔皇位継承〕事業が混乱するような方策を講じるであろうことも、サリームには分かっていた。彼はアブル・ファズルが本隊から離れてデカンを後にしたことを聞き知ると、ラージャ・マドゥカル (Rāja Madhukar) の息子ラージャ・ビルシング・デーヴ (Rāja Birsingh Dev) に密書を書き送った。ビルシングはオンドチャ (Onḍcha またオルチャ Orchha と) を拠点にしたブンデーラ族 (Bundela ラージプート系) の首長で、この当時は追剥行為をしながら過ごしていたが、サリームの謀叛を支持していた。サリームはこの密書のなかで、何としても道中でアブル・ファズルの行動にけりをつけよ、もし神が自分に玉座をお恵み下されば存分の地位と褒美によって栄誉を与えよう、と伝えた。ビルシングはこれまでにムガル宮中に対し多大の不名誉を引き起こしていた。そのため、彼は非常に喜んでこの任務を引き受けた。そして大急ぎで自分の持ち場に到着した。

アブル・ファズルがウッジャイン (Ujjain マールワ州の州都、古代のウッジャインー) に到着したとき⁽¹⁴⁾、ラージャ・ビルシングがどうこうしながら当地にやってくる、とのうわさが広がっていた。献身的な同志たちはアブル・ファズルに言った。「我が方は小集団です。もしこのうわさが本当ならば、対抗するのは困難でしょう。今の進路を断めてチャンド (Chānda)⁽¹⁵⁾ の谷間を進むほうが得策です」。裁定が下された。アブル・ファズルは気にすることなく言った。「諸君は余計なことを言うものだ。皇帝の僕たちが通る道^{しもべ}を阻止しようとする盗賊どもに、一体どんな覇気があるというのか」。

ヒジュラ暦1011年第1ラビー月1日金曜日(1602年8月9日月曜日)の朝のことであった⁽¹⁶⁾。アブル・ファズルは旅宿(manzil)から出発した。2, 3人の男たちが連れ立って馬を疾駆させながら森のなかを自在に走り回っていた。アブル・ファズルは朝の冷気を吸いつつ語りながら前進していた。サラエ・バラエ(Sarā-e Barā)から半コース、またアントリー(Antrī)の町まで3コースのところにさしかかった⁽¹⁷⁾。一騎の騎馬兵が疾駆しながらアブル・ファズルのもとにやってきて、彼方に砂塵が舞い上がっていると言上した。その顔はアブル・ファズルに見覚えがあった。アブル・ファズルは手綱を引き止め、彼の顔をよく見た。往時以来献身的に尽くしてくれるガダーイー・ハーン・アフガーン(Gada'ī Khān Afghān)に他ならなかった。彼が下馬して言上する余裕はなかった。「敵が大軍で襲来してきているのは疑いありません。当方の軍団は極めて少数であります。この際、方策はただ一つです。貴殿はひそかにここを立ち去って下さい。私奴はここにいる何人かの同志並びに(484)同行の者たちとともに奮闘して敵を阻止します。私たちの死闘にけりがつくまでには、十分な時間があります。アントリーの町までは2, 3コースであり、その間に貴殿は首尾よくそこに到着できるでしょう。そうすればもう危険はありません。ラーエー・ラーヤーン(Rā'e Rāyān)とラージャ・ラージ・シング(Rāja Raj Singh)が2, 3千の軍隊とともにそこに待機しております」。アブル・ファズルは次のように言った。「ガダーイー・ハーンよ、こうした時に、このような方策を打ち出してくれる汝のような人物がいてくれることは驚嘆すべきことだ。ジャラルッディーン・ムハンマド・アクバル陛下は、隠者(faqīr)の息子である私をモスクの隅から引き出して司令官(ṣadr)の席にお着かせ下さった。私が今日この日、陛下から賜っていた身元証明(shanākht)を破毀し、この盗賊どもの前から逃げ出していくなど、どうしてできよう。そしてまた、何の面目あってライバルたちに互して座を占めることなどできようぞ。もし人生が尽きてしまい、運命によって死ぬことが定まっていたとしても、どうすることもできないではないか」。こう言って、アブル・ファズルはこの上ない勇敢さと大胆さを奪って馬を駆り出した。ガダーイー・ハーンもまた馬を駆り立てて前進し、次のように言った。「兵士たちにはこうした戦

い方は決して珍しくありません。意地を張っている時ではありません。アントリーへ行って下さい。そしてそこに待機中の兵士たちを率いて、再び敵どもを襲撃して下さい。このようにして報復を果たすのは軍隊らしい策略です」。天命はすでに下っており、アブル・ファズルはいかなる方法にも賛成しなかった。

2人がこうしたやり取りをしている間に、敵がその場に襲ってきた。手で制止する余裕さえ与えなかった。アブル・ファズルは大勇を奮って剣を取り、ひるむことはなかった。何人かのアフガン人たちが加勢した。彼らは身命を尽くし榮譽に輝いた。アブル・ファズルは何箇所か負傷した。しかしながら長槍で受けた傷によって、馬上から転落した。応戦しようと意を決したとき、死体の検体をしようとしているのが眼に映った。かくして、あるときはアクバルの玉座をしっかりと支えて請願を取り仕切り、あるときは思考の海に漕ぎ出して思想界(‘alam-e khiyāl)を征服していた勇者は、一本の樹木の根元の誰もいない地上に息絶えて崩れ落ちた。傷から大量の血が吹き出していた。あちこちに屍体が横たわっていた。こうしたときにアブル・ファズルの首は刎ねられ、皇子サリームのもとに送られた。サリームはそれを便所に投げ込ませ、何日間もそこに放置させた。まさにそのような運命に定められていたのだ。そうではないとしたら、サリームの怒りがかくも激しいものであったといわれる所以は、用心深いアブル・ファズルの気持がサリームに全く理解されていなかったからであろう。アクバルは、生きて自分の面前に伺候せよとする勅命に賭けていた。しかしながら、酒と肉には実にうぶであったけれども、こと理解力にかけては途方もない才能を有していたかの若者(アブル・ファズル)は、一体何処^{いずこ}に行ってしまったというのであろうか。生きている限り、いつでも権能がついて回らと思っていたあの若者よ。死んでしまえば、どうすることもできないではないか。

アクバルの貴顕たちの心中の様子は、コーカルターシュ・ハーン(Kokaltāsh Khān)が「アブル・ファズル死去の」年代表示銘(ta’rīkh)を記した次のような微妙な要言によって明らかである。半句(miṣra’)

アッラーの預言者の驚異の剣、不信者の項を刎ねり⁽¹⁸⁾

だがアブル・ファズルは夢のなかでコーカルターシュに次のように語っ

た。「私の年代表示銘は『神の僕^{しもべ}アブル・ファズル』(banda Abu'l-Fazl) ⁽¹⁹⁾の数值によって示されている」。残念なのは、バダウニーがこの当時存命していなかったことである。もし在世中であつたならば、彼は快哉を叫び、こっそりと祝賀の花を盛り飾って論説を書き留めたことであろう ⁽²⁰⁾。

ジャハーンギールはあらゆる事柄に無頓着に対応しながら過ごしていたが、そのような無頓着さでもって自分の回顧録(*Tūzūk-i Jahāngīrī*)のなかでも書き記していた。(485)そのような訳で、彼が即位して貴顕たちを官職に叙任するのを記したところで、次のように述べている。「ブンデラ地方のラージプート人たちのなかでは、ラージャ・ビルシング・デーオに私は目を掛けています。彼は勇敢な好人物である。ばか正直さの点では、同等者たちのなかで飛び抜けている。彼に官位三千位の榮譽を授けた。昇進と^{ひいき}鼻^の眞^{まこと}は次の理由に拠るものであった。父帝は晩年、シャイフ・アブル・ファズルをデカンから呼び戻した。彼はヒンドゥスターンのシャイフたちのなかで、〔父帝から受けた〕恩恵の多大さ並びに賢明さの点で傑出していた。そして外見を誠実の装いで飾り立て、父帝の手元に高い値段で売り込んでいた。彼の心中は私によく分からなかった。いつも公然と、あるいはこっそりと陰口を叩いていた。この当時、というのは謀叛沙汰の騒動で厳父は私のためにかなり傷ついていたころのことなのだが、私は確信をもっていた。もし帝国が彼の奉職を受け入れれば、彼は紛糾の土埃を一層まき上げるであろうし、我が帝国は結束を阻害されることになるろう、と。そしてまた彼は、私が登極の幸運から止むなくも排除され通しとなるよう仕向けることであろう。ビルシング・デーオの国はアブル・ファズルの道中に位置していた。当時ビルシングもまた反抗者たちに加わっていた。私は何度も彼に伝言を送り、もしこの騒動扇動者を阻止して亡き者にすれば、全幅の恩寵を手にするであろうと伝えた。その結果、天佑は彼の側についた。アブル・ファズルが彼の支配地の境界近くを通過していたとき、彼はアブル・ファズルに襲い掛かり、実に容易に彼の同行者たちを蹴散らした。彼はアブル・ファズルの首をイラーハーバードの私のもとに送り届けてきた。たとえこのことによって先帝の御心が深く傷ついても、しかし少なくとも次のような結果を生み出したのは確かであった。すなわち、私

は心配することなく安全に宮廷の入り口に額づき、先帝の鬱憤は徐々にすっきりと消えていったのだ」⁽²¹⁾。

インドの後の世の歴史家たちは、こうした皇帝たちの下にいた臣民であつた。それでも「アブル・ファズル謀殺の」事態を述べようとすれば、どうしても哀れを催さざるをえなかった。

ムハンマド・カーシム・フィリシュタ (Muḥammad Qāsim Firishta) は彼の著した信頼の厚い歴史書のなかで、この事件に関し僅かに次のように述べるに止めている。「この年シャイフ・アブル・ファズルはデカンから皇帝の御前に伺候することになっていた。道中、追剥たちによって惨殺された」。ただこれだけである⁽²²⁾。ここまで書くことは著者に許容された。考えても見よ。ただ真実のみを書くということの罪によって、アブドゥルカーディル・バダーウーニーの一家並びに彼の息子の身の上に、ジャハーンギールによってどのような苦難がもたらされたかということ。またバダーウーニー本人が仮に存命中であつたならば、彼がどんな目に遭つたであろうかということ。

デ・レート (De Laet) という名のさるオランダの旅行家 (saiyāh) は、この事件 (アブル・ファズル謀殺事件) の説明を書き止めている⁽²³⁾。彼にとって、真実を述べることにはいささかの危険もなかった。このため、彼が書いたことが全く真実を記したものであつたとしても不思議ではない。彼の述べるところによれば、サリームはイラーハーバードに戻ると独自の王国を主張し、金曜日の礼拝の説教 (khuṭba) で自分の名前を唱えさせ、金貨・銀貨に自分の印章を刻印させた。さらに、途方もない財宝を金融業者や貿易業者たちと取引しながら、彼らを父帝が見て苛立つようにアーグラまで連れて行った。父帝はこうした事情をすべてアブル・ファズルに手紙で知らせた。アブル・ファズルは次のような返事を書き送った。「陛下、ご安心下さい。できるだけ早く伺候いたします。そして皇子を望ましい状態のもとであれ (486)、あるいはそうでない状態のもとであれ、陛下の御前に伺候させてみせます」。

かくしてアブル・ファズルは遠征事業に見直しを加え、数日後ダーニヤールの承認をえて、2、3百の兵士を率いて出発した。荷物は後から届け

るように命じた。サリームにはあらゆる知らせが随時届いていた。サリームは、アブル・ファズルが心中自分に対してどのような気持を抱いているかをよく知っていた。そして父帝が今後一段と激怒するのを恐れた。そのため、アブル・ファズルの帰還を何としても阻止せねばならなかった。ラージャ・ビルシングがウッジャイン州(マールワ州)にいたので、彼に次のように書き送った。ナルワー (Narwā)⁽²⁴⁾とグワーリヤールの付近で待ち伏せしておれ。そして機会をとらえてアブル・ファズルの首を刎ね、それを送り届けよ、と。それに対し多大の褒賞金と官位五千位の約束をした。ビルシングは喜んで承諾した。彼は千騎の騎兵と3千の歩兵を率い、3、4コース近くまでやってきた。そして相手方の様子を探るために斥候をあちこちに放った。彼らの知らせるところでは、アブル・ファズルはビルシングたちの待ち伏せに全く気づいていなかった。アブル・ファズルがカーレーバグ(Kale-bagh)⁽²⁵⁾に到着し、さらにナルワーに向かおうとしたとき、ビルシングに知らせが届いた。ビルシングは自軍を率い、突然姿を現わして襲撃した。そして四方を包囲した。アブル・ファズルと彼の同志たちは実に勇敢に戦った。しかし敵の軍勢ははるかに勝^{まさ}っていた。このため一人残らず斬られて討ち死にした。アブル・ファズルの屍体は12箇所^{12カ所}の傷を受け、1本の樹木の下に横たわっていた。ビルシングは地面から屍体を引き起こし、首を切り取った。そして皇子のもとに送り届けた。皇子は非常に喜んだ。デ・レート^{デ・レイト}の記述は以上の如くである。

私アーザードの見解は以下の通り。この事件に関し、ムガル朝の全ての歴史家たちはアブル・ファズルを非難している。曰く、彼は自惚れた頑固な人物であった。自分の知性を鼻^{なんびと}にかけて何人も理解しよう^{まんびと}とさえしなかった。飽くまでも自説を貫き通し、それに相応しい結末をえた、云々。しかしながら実のところ、この事件は深く検討すべき性格のものである。次の点には何ら疑いはない。アブル・ファズルは、自分が無比の美点並びに知性と学問を有していることに気付いていた。またアクバルの宮廷において苦勞を厭わぬ努力や献身的な勤仕を果たしている人々に対して、彼は信頼をおいていた。同時に彼は次のように考えていたことであろう。自分のような人物に対して、皇子サリームがまさか打ち殺してしまえというよ

うな命令を下すことはないであろう、と。あるいはまた次のように考えていたかもしれない。あの酒好き肉好きの青年(サリーム)がたとえそうした命令を下したとしても、土侯的人物(sardār ビルシングをさす)がまさか自分の命を狙うようなことはしないであろう。彼奴はきっと自分を捕えてサリームの前に連れ出すであろう、と。貴顕たちは宮廷に対して反抗的であった。軍隊の兵士たちは殺傷沙汰を行ない、任務を放棄していた。彼らは財産を略奪し、破壊的活動を行っていた。それでもなおムガル朝の宮廷では彼らの過ちが容赦され、彼らの財産と官位が現状のまま維持されて、そこからさらに高い地位に引き上げられるという有様であった。挙句の果て、皇子の方はアブル・ファズルが父帝の御前で告げ口をしていると思うに至っては、アブル・ファズルとしては何をか言んやである。こういう訳であるので、戦場から逃げ去り逃亡者と呼ばれることは言語道断である、卑怯と臆病という烙印を背負うことなど、どうしてできようぞ。ここに断固踏み止まろう。だが結局奴らは自分を捕まえて皇子の前に(487)突き出すことになる。片やアレキサンドロスとプラトン(Aflātūn)は、逆上するようなことがあれば、悪鬼(pari 怒りを表象する)をこしらえ、それをガラスのなかに封じ込めてしまったかもしれないが、こちらの相手は無知蒙昧のサリームときているので、アブル・ファズルとしては二つの呪文(mantar)のようなものをかけてみようかとも思った。すなわち、一つは思い切って彼の方に身を寄せること⁽²⁶⁾、そしてその上で二つ目は彼の手を縛って彼の父のもとに連れていくことだ。そうはいっても、神の定めた運命ということについてアブル・ファズルは薄薄感づいていた。そしてそのことは現実のものとなった。それとともに多少とも考えてみる必要があるのは、かのブンデーラの輩が今回演じたような集団的襲撃をこととする盗賊に他ならなかった、ということである。ビルシングがひとかどにラージャの称号を有していたとしても、また統治上の定めに沿って振舞うことになっている人物であったとして、如上のような野蛮なやり方でアブル・ファズルの事業を頓挫させてしまったのであった。彼らは有無を言わず、遮二無二襲いかかった。その結果、何もかも暗のなかに消えてしまった。彼らは、まるで数頭の雌山羊に飛びかかっていった何百頭もの狼であって、

一瞬のうちにずたずたに引き裂き、逃げ去っていったのであった。

さてアクバル宮廷の方はどうであったかといえば、アブル・ファズル惨殺の知らせが宮廷に届くと、息をひそめた静寂が広がった。誰も周章狼狽した。皇帝に何と言ったらよいか考えあぐねていた。なぜならアクバルは、アブル・ファズルこそは自分に対して個人的に好意を抱く人物であることをよく知り抜いていたからである。しかも宮廷内は「アブル・ファズルを除けば」誰一人として心からアクバルに忠誠を尽くす貴顕はいなかった。どんな意見が罷り通っているのか、どこで紛議が生じているのか、皆目見当がつかなかった。ティムール朝(al-e Tīmūr ムガル朝をさす)では、次のような古くからの慣習があった。皇子の誰かが死ぬようなことがあれば、その知らせは皇帝の面前でおおっぴらにはっきりと言上されることはなかった。皇子の名代が黒いハンカチーフを手首に結わえ付けて御前に現われ、黙って立っていた。それはとりもおさず彼の主人が身罷ったことを示していた。

アクバルはアブル・ファズルを自分の息子たちよりも一層可愛がっていた。そのためアブル・ファズルの名代は頭を垂れ、ハンカチーフを手首に結わえ、ゆっくりと畏^{かしこ}まって玉座の側にやってきた。アクバルはこれを見て仰天してしまった。そして次のように言った。「これは！一体どうしたというのか」。名代が具申すると、アクバルは自分の息子たちの死に対してさえ見せなかったような深い悲嘆と不安にとらわれた。それから数日間、アクバルは謁見を取り止め、いかなる貴顕とも口を利くことはなかった。無念の思いに沈み、悲泣した。始終自分の胸を叩いていた。そして再三こう口にした。「ああ！シャイフ(アブル・ファズル)よ。サリームが皇帝位を手にしたければ、余を殺せばいいものを。何とシャイフを^{あや}危めるとは！」。アブル・ファズルの首のない屍^{しかばね}が運ばれてくると、アクバルは次のような詩を詠んだ。詩(shi'r)。

余のシャイフは限りなき望みを抱き余のもとに來たれり

余の足への口づけを望みながら首も足もなく來たれり⁽²⁷⁾

52年と数ヵ月の寿命であった⁽²⁸⁾。まだ死ぬ齡ではなかった。だが死は昼夜をおかずにやってくる。死がやってくれば、その時がまさに寿命とい

うものだ。

アブル・ファズルの墓は、グワーリヤールから5、6コース離れたアントリーに今もなお存在する。ここは現在マハーラージャ・シーンディヤー (Mahārāja Sindhīyā) 家の領土に組み入れられている。ここに貧弱な構造の建物が建っている。アブル・ファズルは自分の父母の遺骨をラホールからアーグラに遷させていた。これによって両親の遺言は実現した。しかしながらアブル・ファズルの遺体を(488)引き取る相続人は誰も謀殺の場になかったのもので、倒れたその場の土に埋められたのであった。彼の良心の輝きと敬虔な祈りに対して、神の恩寵が下されている。その結果、今日に至るまでアントリーの人々は、毎週木曜日になると彼の墓廟に何千もの灯明を灯し供物を供えている。

蛍が飛びかいたが荒野の方へと向かっていく

今もなお何処^{いずこ}かにあるマジュヌーンの灯明にならんとして

かの人の手は己が心髄の如く拝火教徒とムスリムの双方に伸び

片手には神像、もう一方にはクルアーンが握られているよう⁽²⁹⁾

アクバルは皇子サリームに一体何と言ったのか。彼はラーエ・ラーヤーンに軍隊を与え、ビルシング・デーオを悪業のかどで刑に処すよう命じて送り出した。〔アブル・ファズルの息子〕アブドゥルラフマーンにも、次のような内容の勅令を書き送った。汝はラーエ・ラーヤーンと共同して任務に参加せよ、そして父の復讐と報復の思いを息子としての適法行為として世の人々に闡明せよ、と。彼ら2人は長期にわたって森と山岳のなかをビルシングを追って放浪したが、ビルシングの方は何処にも長逗留することなく、戦闘と逃亡を繰り返していた。アブル・ファズルはかつて正鵠を射て、盗賊のビルシングがどうして一箇所に落ち着いて戦うことなどできようと言っていた。ラーエ・ラーヤーンとアブドゥルラフマーンは結局、疲労困憊して戻ってきた。

無念の筆に悪運の墨汁をつけて書けることは、次のことだけである。かの恩寵と完璧さは、アブル・ファズルとファイジーとともにこの世から消え去ってしまった。屹立した兄弟。そして一人息子のアブドゥルラフマーン。彼らはすべて故人となってしまった。

アブル・ファズルの宗教論

アクブル宮廷内の人々は、シャイフ・ムバーラクの宗教事情についてはよく知っていた。アブル・ファズルは彼の正統を継ぐ息子であった。考えてもみよ。アブル・ファズルの思想もまた父ムバーラクの思想の純粋な申し子であった。しかしながら時代の気風の影響を受けて、多少は色調を異にしていた。これから述べる諸点はシャイフ・ムバーラクやファイジー、その他の学者について述べたところと重複してしまうかもしれないが、しかし実のところ私の方でも、これら諸点について繰り返し語りながら悦に入っているのである。それゆえいま一度、心中の思いを引き出すことにしよう。そうすれば、あるいはそのうちに真実を覆う幕が上がっていくことになるかもしれないからである。読者諸賢におかれてはご存じであろうが、それでもなお知っておいていただきたいことがある。それはつまり、シャイフ・ムバーラクは一人の傑出した博学者であったということである。彼は非常に鮮烈な定評を博して登場したため、学問の道をかざすための輝く灯火となった。彼はあらゆる学問分野の書物を、熟達した教師たちと一緒に読み、また彼らに教えていた。彼の観点はあらゆる理知的、伝承的学問に対して等しく嫌悪感を含んだものであった。それにもかかわらず多少とも心の琴線に触れえたものは、書物中のことばや文体だけに限られてはいなかった。彼の得心の域に達したものかどうか、ということが問題であった。

この当時、何人かの学者たちがいた。彼らはクルアーン学においてはよく通じていたり、あるいは未熟であったりしたが、幸運には巡り合わせていなかった。彼らはその当時の国王たちの介添えをえて宮廷入りを果たし、王的権能のみならず神的権能さえ誇示していた。彼らの手が上質食油(ghi)でべとべとに濡れ、指が飽食にありつくための鍵となっていることを目の当りにして、上座に座るウラマーたちやシャイフたち、モスクの導師たちは(489)彼らの周りに集まり、彼らが口にする言葉を復唱していた。シャイフ・ムバーラクは宮廷に取り入ろうとする野望をもってはいなかった。彼の心中には、神の命じる次のような規範が行き届いていた。自分の

モスクで何人かの学生たちがテラスに座り、書物を開いていたとする。そうしたときの学生たちのさんざめきがもたらしてくれる愉しきは、花園においてバラとても、はたまたサヨナキドリとても得ることのできぬ愉しみなのであるぞよ、と。その意味するところは、諸王の宮廷や貴顕たちのいる政庁の方向に彼の関心が向かうことはついぞなかった、ということである。しかしながら、上に述べたようなウラマーたちが誰か哀れな者に対し、抑圧的な強権と教令の威力とによって暴虐を働き、そのためにその哀れな者が助けを求めてくるようなことがあれば、シャイフ・ムバーラクはクルアーンの数節といくつかの伝承(riwāyat)とによって、その者に護身の楯を用意してやっていた。その楯によって、暴虐を受けた哀れな者の命は救われた。またこうした類いの事柄に関連して、ムバーラクは誰彼のために証書(parwāna)を作ってやることがあった。一方かのウラマーたちも、〔ムバーラクの仕業に〕気付いていた。そして自分たちの会合において、ムバーラクに関するあれこれのうわさ話を陰險な言葉を使いながら行なっていた。彼らは、あるときはムバーラクがラーフィジー派(Rāfiʿī)⁽³⁰⁾に属しているとし、あるときはマフダウィー派(Mahdawī)⁽³¹⁾であると決めつけていた。この種の宗教的過誤に対する刑罰は、この当時はなんと死刑に処すことであった。しかしながらムバーラクの有した卓越性と主張の正しさが信用されるようになると、彼に勢いがもたらされた。彼は人の語るのを聞くと破顔一笑し、そしてこう口にするのが常であった。「それは誰^{どなた}方のことですか。そしてまた何のことでしょう。貴方はどのようにお考えなのですか。私の考えはいつか話し合う機会がやってくれば、お教えいたすことにしましょう」。

シャイフ・ムバーラクのこのような処し方は、時として彼を危険に陥れることがあり、またひどく面倒なことに巻き込むことがあった。しかし彼は少しも気にすることはなかった。そして彼の反対者たちを軽く受け止め、そのまま過ごしていた。アジア(Īshyā)に流布している諸宗教、とりわけイスラーム教諸派の經典に関する彼の知識は、月光のように広く行きわたっていた。彼は自分の敵対者たちのもたらす害毒が広範に及んでいることを知って、種々の書物を別の観点から検討しはじめた。何か解釈上の問

題が生ずると、彼はたちどころに書物を参照して論争相手たちのいかさまぶりを封殺したり、あるいは件の問題とは相対立する別の問題を提示して混乱を生じさせ、相手が苛立って音をあげるように仕向けていった。しかしながら、ムバーラクが何がしか話したことは、熟考を重ねかつ真理の程を吟味して、典拠と事実に基づいて口にしたものに他ならなかった。なぜならば論争相手たちが発する教令(fatwa)には、王の発給する詔勅のような威力があったからである。もしこの教令が真実に基づいていなかったならば、生命を傷つけるものとなったのである。

フマユーンとシェール・シャー（スール朝創始者、在位1540-1545）およびイスラーム・シャー（スール朝第2代スルターン、在位1545-1552）の治世時代、上に述べたようなムバーラクの論争相手たちの宗教的権威(khuda'i)が続いていた。そしてアクバル時代の数年間の統治は、彼らの言いなりに行われていた。若年の皇帝アクバルは帝国の領域を全ヒンドウスターンに拡大しようと考えていた。ヒンドウスターンにはさまざまな民族(qaum)とさまざまな宗派の人々が住んでいるので、思いやりと愛情をもって事業を進めていくことが不可欠であった。アクバルはこうした試みにおいても成功を博した。だが如上のウラマーたちは、このような道を進むことは神の冒瀆(kufr)であると考えた。主権者たる皇帝はこうした統治方式(宥和主義的統治)を推進する役人たちを配置しなくてはならなかった。ファイジーとアブル・ファズルは博識の学者であった。そしてまたさまざまな素質を有していた。彼ら2人は主君の命令の実行並びに勤仕にとって欠かせぬことを、主君の気に入られるよう積極的に遂行した。両人は帝国行政の実践規範(dastūr al-'amal)として、次のような定めを設けた。神は両界の主(rabb al-'alimīn)であり、人々の安らぎと繁栄を統べる方である。ヒンドゥー教徒もイスラーム教徒も、ゾロアスター教徒(gabr)もキリスト教徒(tarsa)も、神の下では(490)すべてが平等である。皇帝は神の影(sāya-e khudā)である。この点を念頭に入れておくのは、皇帝に対する当然の義務である。以上のような極く短い網要のなかに、いくつかの目標が込められていた。帝国の基盤は強固となった。皇帝への接近は可能となった。自分たちに生命の危険をもたらしっていた宮廷参内者たちは、ひとりでに凋落

していった。帝国とその政府はただイスラーム教だけに認められた権利であると解していたウラマーたち、並びに彼らのイスラーム共同体にとって、事業は当初の好調さを維持することができなくなった。彼らはアブル・ファズルたちを悪し様に貶した。事実はどうであったかといえば、アブル・ファズルたちは皇帝の下した用命を皇帝が気に入るようにある程度水準を高めて実行していたのであった。例えていえば、皇帝の歡びようを目にすると、イマーマ(imāma 古代ペルシア風ターバン)を外して、前に開口部のあるパグリー(pagrī インド風ターバン)を着け、アバー(‘abā アラビア風ガウン)を脱いでジャーマ(jāma ペルシア風ガウン)を着る、といったような風体である。さるヒンドゥー教徒を、長老の司法長官がイスラーム法に基づく教令によって死刑に処したことがあった⁽³²⁾。アブル・ファズルたちは論争の場において、司法長官の味方をしなかった。そして皇帝の言葉を支持した。この皇帝の言葉に対して、件の学者(司法長官)は打撃を加えようとした。修行をこととするヨーロッパ諸国の賢者たちは、神父(pādahrī)と呼ばれている。また熟達した法解釈者(muḥtāhid)は、時宜に応じて法令の改変を行なうことができるし、国王さえも彼の下す法令に違背することはできない。このような人は教皇(pāpa)と呼ばれている。教皇たちは人々に福音書(injīl)を示し、三位一体(taḥḥiṣ)の論拠を示し、キリスト教(naṣrāniyat)の教えを明らかにして、イエスの宗教を盛んにした。皇帝アクバルは〔若いときの〕皇子ムラードに〔キリスト教について学ぼう〕諭し、皇子はそれを皇帝の恩寵の現れのように解していくつかの教科を学んだ。アブル・ファズルは翻訳の用命を引き受けた。その翻訳はビスミラー⁽³³⁾の代りに、次のような半句で始まっていた。

おお！ 名高き老子⁽³⁴⁾よキリストよ

シャイフ・ファイジーの言うことには

並ぶものなき神を讀えまつれと

またあるところで〔皇帝の〕合図があると、グジャラートのあちこちから拝火教徒が集まってきた。彼らはゾロアスター(Zardusht)の宗教の本質を明らかにした。そして火の崇拜が偉大な信仰の実践であることを説明して、自分たちに最^{ひい き}眞を引き寄せた。彼らは〔ペルシア神話の〕カヤー

ニー朝の風習並びに彼らの宗教の専門的用語を語り伝えた。アブル・ファズルを呼び寄せるよう命令が下された。そしてペルシアの国の拝火教神殿(atish-kada)で絶えず灯明がともされているように、ムガル朝の宮殿においても常時、昼であろうと夜であろうと灯明がともしつづけられるよう命じられた。クルアーン諸節中の1節は、灯明の光線の束のうちの1光線に相当するものとされた。

何も驚くことではない。なぜなら帝国の諸事業は多岐にわたっており、国家にとって都合のよい宗教上の神はフダー(khudā)であったからである⁽³⁵⁾。このことにはアクバルでさえも意義を差しはさむことはできなかった。彼とてフダーの召使いであって、主人たるフダーの命令があった場合はそれを果たさねばならなかった。ここまでは、ことは簡単であった。だが難儀なのは次のことであった。シャイフ・ムバーラクが死去すると、アブル・ファズルは兄とともに剃髪(bhadra)した⁽³⁶⁾。その根源にはただ一つのこと、すなわち皇帝がどの宗教に対しても親愛と敬意を表していたことがあった。皇帝とヒンドゥー教徒たちとの間に極めて友好的な関係が存在していた。このためにヒンドゥー教徒たちの方がアブル・ファズルたち〔のようなイスラーム教徒たち〕よりも優勢であった。

かくして、亡くなったかの女性並びにマリヤム・マカーニーの死去が続くと⁽³⁷⁾、いずれのときもアクバルは自ら剃髪を行なった。その理由は(491)次のことにあった。すなわち、往時トルコ人の諸王たちもまたそうした機会には剃髪を行なう習慣があったのである⁽³⁸⁾。皇帝アクバルが喜ぶのを見て、彼らも剃髪を行なったのであった。こうしたことはすべて、皇帝の歓心を買ひ皇帝の抱く国家的利害に沿うためになされたことであった。そうでなかったならば、自ら有する鋭敏な思考と迫力ある弁舌によって、プラトンの論拠とアリストテレスの上げる証拠をまるで綿を打つ如く弾き飛ばしていたファイジーとアブル・ファズルが、その上さらに皇帝アクバルの神聖宗教(dīn-i ilāhī)を信用したり、はたまた上に述べた諸々の点が彼らの確信となるというようなことは、とても考えられぬことであった。

ファイジーとアブル・ファズルは何もかもそつ無くやり遂げていたことであろう。それでも彼らは身近かな会合に出ると、こう言ったかもしれない

い。「今日は何と馬鹿げたことを仕出かしたものだ」と。誰一人何のことかさっぱり分らない様子だった。本当のことはどうかといえ、例えば彼らの強力な競争相手がその場にいたのだった。そして手の施しようのない状況が彼らの眼前に生じたのであった。彼らがこうした唐突な提案をすること以外には、その会合を中止することができなかった。マフドゥームル・ムルクたちの警告と、それに対するアブル・ファズルの「我々は皇帝の臣下(naukar)であって、茄子(baingan)どもの臣下ではないのだ」なる返答を、ここで私たちは想起するのがよからう。

『アブル・ファズル名文集』(アッラーミー書簡集)を見てみると、ハーニ・ハーナーンがアブル・ファズル宛に認めたさる書簡のなかで次のように尋ねていた。貴殿の考えは、宗教と法令によく通じたイーラジュ (Īraj)⁽³⁹⁾をどうも宮廷に送り込もうというもののようだが、彼はこちら(デカン地方)で私と一緒に遠征軍中におり、森のなかを困惑しながら彷徨している、と。これに対してアブル・ファズルは書簡を書き送り、如上の点について次のような内容の一文を草している。宮廷にイーラジュを送るのがどうして必要であるというのであろうか。貴殿には、この件に関して別の見方の考えがあるはずである。[イーラジュを宮廷に送り込むかどうかといった] この種の期待は無益なものである。宮廷側のこの件に関する真実の見解がいかなるものであったのか、方今貴殿はよく考えていただきたい、と。この一文は、ペンからインクが滴り落ちて成ったかのような文章である。

アブル・ファズルの書き残したのを見ると、僅かでも機会があれば誠心誠意をもって献身的な右筆活動と臣下としての勤めを果たしていたことが分かる。また彼は神学(falsafa-e ilāhī)の問題については、プラトンが今もしも存命していたならば自分の手に〔賛同の〕接吻をしたことであろうといって、自ら太鼓判を捺している。アブル・ファズルの〔著した『アクバル・ナーマ』の〕第2巻と第3巻を見るとよい。彼の賞賛はシャイフ・シブリーが行なっただろうし、あるいはまたジュナイド・バグダーディーが行なったことであろう⁽⁴⁰⁾。私アーザードはさらに何を語ればよいのか。

なぜなら真珠を^{あなが}購いて彼の^{みみたぶ}の耳朶を飾んとしても

我が言の葉は今もなお知恵の水にて清められず⁽⁴¹⁾

シャー・アブル・マアーリー・ラーホーリー(Shah Abu'l Ma'ali Lahori)⁽⁴²⁾は、彼のさる書き物のなかで次のように述べている。「私はシャイフ・アブル・ファズルのことをあまりよく知っていなかった。ある夜、〔夢のなかで〕彼が連れてこられて着座させられていた。彼はかの御方(ān-haṣrat 預言者ムハンマド)の外套を羽織っていた。訊ねてみて明らかとなったことは、彼の赦贖(bakhshish)の道は神への祈りの言葉を唱えることであって、その冒頭句は次の通りである。“おお神よ、善良の人々に善業を嘉して栄光を与えたまえ。善しなき人々には慈愛によって慰めを恵みたまえ”」⁽⁴³⁾。

『ザヒーラトゥル・ハワーニーン』(*Zakhīrat al-Khawānīn* 大官淵叢の意)のなかで次のように書かれている⁽⁴⁴⁾。彼は夜になるとファキール(faqīr 托鉢僧)たちのもとに足を運び、金貨を与えて次のようによく口にしたものだった。「アブル・ファズルの信仰の安寧のために祈禱してくれ」と。また、「さて、何をしたものか」というのが彼の口癖(takya-kalām)であった。この言葉をしばしば口にし、そして低い嘆息を漏らす癖があった⁽⁴⁵⁾。

(492) アクバルはカシュミールに、ヒンドゥー教徒でもイスラーム教徒でも気が向けばやってきて休息し、そしてまた真実の神(ma'būde ḥaqīqī)の思念に没頭することができる、そういうような立派な建物を建造した。それについては、以下に詳しく紹介するような描写のなされたものがある。この描写はアブル・ファズルがなしたものである。この描写に用いられている表現に、しばし眼を止めていただきたい。彼の衷心から滲み出てきた言葉である。

私(アブル・ファズル)が目にする欽定の卓越館(*bahr-khāna*)は神を尋ねるところである。私が耳にする皇帝の言葉は神の口舌である。詩。

不信心者も敬虔の徒も神の慈悲⁽⁴⁶⁾を尋ね求め

並ぶものなき神との一体化(waḥda)を探し求める

もしモスクが冒瀆(satt)されれば、神の怒号が巻き起こるであろうし、
 またもし教会(kalīsa)が真理(sat)に興ずれば、しきりに鐘を打ち鳴らすことであろう。四行詩(rubā'ī)。

ああ、汝(神)の庇護の矢が恋人たち(信者たち)の心に的を絞る

人々は汝の後を追えども汝は中道より姿を隠せり

あるときは修道院の隠者となり、あるときはモスクの住人となりて

我はただ汝を探し求め戸毎を尋ね歩くのみ

もし汝の高官たちが熱狂の異教徒でも、はたまたイスラーム教徒でもないとしたら、こうした高官たち双方をイスラーム教の帳とばりのなかに決して一緒に入れること勿れ。

忘恩の不信心者と敬虔な信者との双方を

はたまた薬物商の些細な心の痛みを癒さんとしても〔帳に入れること勿れ〕

この館はヒンドゥスターンの統一神論者(muwaḥḥid)たち、とりわけカシュミール地域の信者たちの精神的連帯(ṭilaf-e qulūb)を目的として建立された。

玉座と王冠に飾られし君王たる

アクバル陛下は被造物を導く灯台たり

公正な統治は七種の鉱物を貯え

四種の要素の融合に完成をもたらす⁽⁴⁷⁾

真実を求める眼の向けられなくなって荒廃した館は、壊さなければならぬ。そうなれば、まずはじめに銘々は自分の礼拝所(ma'bad)を造ることになろう。なぜなら、たとえ心中に意識が向けられたとしても、ただそのように装われているだけであったり、また眼が物質の方に向けられているだけであったりすれば、そのような館は廃棄するのが相応しいからである。マスナウィー (maṣnawī)。

おお神よ、汝が正義を行ないし時

履行の中軸は汝の意思の上に据えられたり

汝の意志が全うされるところは

皇帝の御前にして皇帝の願いのあるところ⁽⁴⁸⁾

ブロックマン氏⁽⁴⁹⁾は次のように書いている。この建造物はアールムギール(アウラングゼーグ)時代に破壊された、と。

ムッラー・サーヒブ(Mulla Ṣaḥīb バダーウーニーをさす)の歴史書を読んでいると、残念に思うことがある⁽⁵⁰⁾。彼はアブル・ファズルの父から教育されるという恩恵を受けたが、その恩師の宗教と信仰の上に大奮もつこに山盛りした土砂を浴びせかけてしまった。これはどういうことかといえ、

一つの目標に対して2組の探求者の熱意がぶつかり合うと、まるで火花の飛び散るような激しいものとなるのである。宮廷に〔アブル・ファズルとバダーウーニーの〕2人の若者が相次いでやってきた。弟子の抱く考えというものは、ともすれば数日のうちに師匠やカリフの考えとさえ一致しなくなることもあるものである。アブル・ファズルは、皇帝が上機嫌のときの程よい頃合いと自分の方の事情の都合との双方を見計らって、しばしば次のような言葉を口にした。これはやむをえぬことであった。「ムッラー・サーヒブが下す教令は、私の意に反したものであります。事の真相は次の通りであります。私が受ける相次ぐ昇進や^{いやま}弥増す恩寵は、ムッラー・サーヒブにとって見るに忍びないものであります。このために彼は不機嫌になったり悶えたりし、また私が地歩を確保するに至った道筋に対して憂さ晴らしをしているのであります」と。とはいえバダーウーニーの才能の素晴らしさを(493)見落としてはならない。彼の知識と資質と著述の面においては、何ら欠点を見出すことはできない。しかしながらどす黒い嫉妬の故に、アクバル好みのクルアーン注釈がアブル・ファズルによって提出された事情を自分の書物のなかで書く際には、アブル・ファズルの父が書いたクルアーン注釈であるとのうわさがあると悪態を浴びせかけているのである。然りとすれば、この注釈はアブル・ファズルの父の作品である。汝バダーウーニーの父の作品ではない。アブル・ファズルの父はあのような人であった。汝ときたら、父親もまたムバーラクのような人物ではなかった。しかも、もし真実のところ他ならぬアブル・ファズルが書いた注釈であったとしたならば、彼はその風聞によって一層称賛を受けるに値することとなろう。20歳の年齢で一人の若者があのようなクルアーン注釈を書き、それをウラマーたちや炯眼の士たちがシャイフ・ムバーラクのような人物の書いた作品と考えたのだ。アブル・ファズルはそうしたことを耳にしたかもしれないし、その時に小匙何杯分かの血が彼の心臓で昂進したかもしれない。彼ら父子たちについては、バダーウーニーの尋常ならざる記述がある。父子たちのうちの誰のことであろうと、あるいはまたそのうちの誰が書いたものであろうと、バダーウーニーは機会を見つけ出しては気の毒なアブル・ファズル父子たちのなかから一人を取り上げ、メスを打ち込んで

いるのだ。

またバダーウーニーはウラマー集團のなかの一人シャイフ・ハサン・マウシリー (Shaikh Ḥasan Mauṣili) について述べている⁽⁵¹⁾。ハサン・マウシリーはシャー・ファトフラー (Shāh Fath Allāh)⁽⁵²⁾の直弟子である。ハサン・マウシリーの人となりについて要言すれば、彼は数学や地理学をはじめ各種の学芸に通じていた。カーブル制圧のとき⁽⁵³⁾、彼は宮中に勤任するようになった。彼は上の皇子(サリーム)の教育の任に就いた。アブル・ファズルもまた上述のような学問をハサン・マウシリーから秘かに学び、それによって微妙な問題の理解や識別力を身につけた。それでもなおアブル・ファズルは彼を尊敬してはいなかった。アブル・ファズルの方は絨毯に座り、師匠のハサン・マウシリーの方は土間に座ることとなった。

アーザードの評言—シャイフ・ハサン・マウシリーはどこに行ってしまったのか。彼の比類なき卓越性はどこに消えたのか。彼に関する言説と省察はいずこかでなされているのだろうか。これらについて調べてみる必要がある。一方、アブル・ファズルは貧者(gharīb 乞食)を蹴とばして追い払ったことがあったし、ファイジーは哀れな者に対してさえ手を緩めず過酷な批判のメスを振っていた。両者には、どこかで1本の共通の矢によって穿たれたところがあるのだろうか。ファイジーの条を参照されよ。

アブル・ファズルの文体

アブル・ファズルの文体(inshā-pardāzi)と叙述法(matlab-nigāri)を定義づけることは不可能なことである。それは神が手ずから親しくもたらしてくれた天賦の賜物である。個々の叙述はそれぞれ見事に表現されているので、読者は読みながら立ち止まってしまう。偉大な文学者たちを見てみると、言葉づかひの優美さと表現の力強さを生み出そうとするときには、叙述に陽春の色調を帯びさせようとする。そして気品と優美さでもって磨きをかけ、表現を多彩かつ魅力的にするのである。こうした筆力は、自らの澄み切った思想と飾り気のない表現にとって、本質的な意義を实によく発

揮する。このため、アブル・ファズルの文体は多様な色調を帯びることとなる。純朴さの満ち溢れた彼の花園にさまざまな画家たちがやってきて絵筆を手にとれば、手そのものが筆になり切ってしまうようだ。彼は文体の創造主(khuda)である。自分の考える好みに合った被造物を造りたいと思えば、それを言葉の鋳型のなかに流し込む。かくして自由自在に、被造物界において彼の書き出したものが新しい仕様となり、また書き出された程度に応じて文章の力が増幅していくのである。彼の体質中に疲労質を見つけ出すことは不可能である⁽⁵⁴⁾。以下私は彼の著作の各写本について解説を行い、私の未熟な能力と非力の筆の及ぶ限り、それぞれの著作品の詳細について明らかにしていこうと思う。

アブル・ファズルの完璧さについて私が述べることは、図らずも今日の流儀からすれば、彼の不完全さについて書いている(494)ことになるのかもしれない。いや、あの当時全世界の人々がアブル・ファズルは完璧であると考えていたのだ。そしてヒンドウスターンの都には各地からやってきた学者たちや傑出した大家たちが雲集していたのだが、そうした時ですら彼はこれらの人々全てのなかに割り込んでいき、誰彼かまわず肘鉄を喰わして最前列に踊り出た。彼の腕力もペンも強力であった。このため諸国の卓抜の士たちは、いつも立ちすくんで見つめていた。一方アブル・ファズルの方は先へ進んでいたり、その場を離れたりしていた。さもなくば一体誰に先へ進むことなど許されよう。彼は既に死去しているが、今日に至るまで彼の著述はすべてを超絶し、すべてを凌駕しているように思われる。

アミーン・アフマドラージー (Amīn Aḥmadrazī)はこの当時、伝記『ハフト・イクリーム』(*Haft Iqlīm* 七気候帯)を書いている⁽⁵⁵⁾。アブル・ファズルはイラン人の部門でも惜しめない渴求を博しているが、インド人としての彼についても次のように真実が披瀝されている。(以下この段落末まではペルシア語のまま引用されている)。「疑いなく彼は努力家であり名文家である。そして著作に恵まれており、称賛を博している。今日、知性('aql)と分別(fahm)において彼に匹敵するものはいない。彼は常時皇帝に勤仕し、名声がすっかり確立しているにもかかわらず、もしもひとときの猶予期間をえたときには、その時間を達人たちの言葉遣いの習得と学者た

ちのかかえる問題の解明に費し、著作において奇跡を遂行することに充当する。彼は、各種の物語のなかの有用なものは新たな表現を用いて自分の作品のなかに取り入れている。彼は〔帝国の〕書記官(munshi)としての務め並びに〔皇帝の〕右筆(mutarassil)としての各種の書き物は別として、その他に自らの果たすべき責務を熟知している。このことを証明するものが『アクバル・ナーマ』である。同時にまた詩を吟ずることに人並みならぬ願望をもっており、優雅にしかつ思慮にたけた秀逸な作品を物している。そしてしばしば天性の詩才を開示することによって、内なる宝庫から自分の思索の軌跡を外に向かって表白する」。

『アクバル・ナーマ』

『アクバル・ナーマ』第1巻中にはティムール朝(silsila-e Tīmūrīya ムガル朝をさす)についての記述があるが、簡潔である。バーブルは多少詳しい。フマーユーンの記述はバーブルよりも詳しい。〔原注：通行版ではここまでが第1巻である〕⁽⁵⁶⁾。次いでアクバルの治世第17年までの記述が続く。ここでもって第1期(qarn awwal)の区切りがつけられている。なぜならば、13歳の年齢で即位して以後17年間にわたる事跡は、ここにおいてアクバル生涯中の30年間が経ったことになるからである〔原注：通行版ではここで第2巻は終わっている〕⁽⁵⁷⁾。

『アクバル・ナーマ』の序章で次のような記述がなされている。秀れた書き手たちは謙遜するものである、と。〔自己を卑下した〕こうした謙虚な記述は称賛に値する。彼はまた次のようにも述べている。私はインド人(Hindī)であり、ペルシア語でものを書くのは私の本務ではなかった。兄の勸奨に従ってこの仕事(『アクバル・ナーマ』の執筆)を始めた。困ったことに、少しばかり書き上げたとき、その兄が他界してしまった。〔最初の〕10年間の記述具合は、兄が肯^{うべな}てくれるようなものではなかった。兄は私のためを思って太鼓判を押さなかったのだ、と。

〔大構想の〕第2巻は治世第18年から始まり、これがすなわち第2期の開

始である。そして治世第46年、ヒジュラ暦1010年⁽⁵⁸⁾(西暦1602年)の記述で終わっている〔原注：通行版ではこれが第3巻となっている。残余のアクバル晩年時代の歴史は、イナーヤトゥッラー・ムヒッブ(‘Ināyat Allah Muḥibb)が執筆してアクバル時代史を完結させた。しかしながらこの増補部分は汎用されていない。エルフィンストーン氏⁽⁵⁹⁾はこの増補部分の作者をムハンマド・サーリフ(Muḥammad Ṣalīḥ)に帰している〕⁽⁶⁰⁾。

〔通行版〕第1巻で、フマールーンの事跡の記述が完結する。その叙述は、陳腐な書記風の堅苦しい慣用表現の(495)向こうを張ったものとなっている。

〔通行版〕第2巻はアクバルの治世17年間の帝国事情を述べたものである。この巻は各種の主題の狂奔、言葉の醸し出す威厳と威風、語勢のほとばしる表現が目立っている。しかも青春の華やかさが漲っている。そのスタイルは、アッバーシー(‘Abbāsī)⁽⁶¹⁾の華麗な様式とターヒル・ワヒード(Ṭahir Wahīd)⁽⁶²⁾の文体に匹敵する。

〔通行版〕第3巻でスタイルの変化が始まっている。表現は次第に極めて厳粛で慎重かつ簡潔なものになっていく。その結果、アクバル晩年のところを見てみると、『アクバル会典』の記述ぶりにかなり近くになっている。けれどもそのスタイルは、いずれにおいてもそれを読めば、これぞ望ましいものだということが伝わってくるものである。各治世年の始まりに際してはもとより、さらにいくつかの戦闘の開始に当たっても、別々に数行か半ページの導入の言葉を寄せている。あるところでは多彩に、別のところでは賢明な手法で寄せている。そうした導入辞のなかで2, 3の詩も実に見事に引いて援用している。そうした詩のなかでは多くの場合、華やかさは少な目で厳粛さが多目になっている。そのような見本の代表例として、各治世年冒頭に付されているいくつかの導入辞を紹介しておこう。

治世第18年の始め⁽⁶³⁾。この幸先のよい時、春の王(太陽)の光り輝く旌旗(きらめく光の束)の飾り手が天然の鏡の磨き手となった。そして庭園を赤バラの絹布とジャスミンの綾絹で飾り立てた。朔風と西風は昨秋の枯枝と枯葉を地上の花園から掃き清めた。穏和な風は、皇帝の放つ公正さの如く、稀有な絵を描き出した。見事な新鮮さと尋常ならぬ美行が人々の新た

な驚嘆を増幅させた。

花壇は軽やかさの故に飛び立たと欲し

ジャスミンは優雅さの故にとろけ出さんと欲す

ジャスミンとバラは相共にキャラバンを組み

コキジバトとサヨナキドリは相共に拍子を取る

太陰暦980年ズール・カーダ月6日(1573年3月11日)水曜日夜の8時7分過ぎに、大地を照らす太陽は白羊宮(burj-i ḥamal)に向かって光を発した⁽⁶⁴⁾。かくして年初の世界(ālam-i 'unṣuri)は神聖な帝王(太陽)の光を獲得した。

治世第22年の始め⁽⁶⁵⁾。正義を友とする皇帝は、ディーパールプール(Dīpālpur)⁽⁶⁶⁾の外れにおいて、弥増す個人的並びに社会的信仰を狩りのべールで被って取り行ない、形相と質料との融合を進められた。そして外観に対して、その内面が有している等級を付与された。春の穏かなサヨナキドリの鳴く音は、人々の面貌を明るく輝かせた。歓喜が広々とした宮廷を取り囲んだ。贈り物にまつわる喧騒は新しい優雅さを帯びていた。〔太陰暦984年〕ズール・ヒッジヤ月20日(1577年3月10日)夜7時12分、神聖な光の国の大きな星(太陽)の新しい光は、白羊宮に差し込んだ。真実の光(太陽)は、初出の様々な色合いを帯びながら姿を現わした。天空は春の宝石(春雨)を大地への贈り物として降り注いだ。また天空は糸目を付けぬ黄金を撒き散らし、帝国の新たな収穫として何千という心そそる幸運(豊作)を送り届けた。世界主(gīti-khidew 皇帝)は感謝の式典を挙行するため新たな法令を選定した。(496)そして恩赦を行なうための喜びの日が到来した。

世界は天命(qudrat)の抱く図案によってマーニー (Manī)⁽⁶⁷⁾の画廊のようになり

花園は叡知の放つ光によってアブー・アリー・シーナー⁽⁶⁸⁾の思想のようになれり

大地は歓喜して果てしない大空の如しと人は言い

果てしない大空は満開の花園の如しと人は言う

治世第26年の始め⁽⁶⁹⁾。

年初を祝う帝国の旌旗が平原に立ち上り^{のぼ}

御神の生気に満ちた恩寵が天上界より下賜される

大空は神の憩う樂園となりて敬肅して立ち止まり

大地は神の乗る鳳輦^{ほうれん}となりて鑽仰して立ち上がる

太陰暦989年サファル月5日(1581年3月11日)木曜日夜の6時22分過ぎに、形相と質料の世界の光る飛行体にしてかつ陰と陽の世界を統べる神の威光⁽⁷⁰⁾が、白羊宮にその輝かしい視線を投げかけた。そして年初の世界をまるで聖なる国のようにその光で満たしてしまった。歓喜の祝宴が新たな装いのもとに催された。逸楽への誘いが声高になされた。このめでたい新年の劈頭に当たり、皇帝は高貴な意向を示されたので、吉兆の旌旗(皇軍をさす)はインダス川の方に向かって進発した。

治世第29年の始め⁽⁷¹⁾。吉祥の年初に当たり、とこしえに続く帝国はこの不滅の世界の新たな希望を得て、またしても歓喜に包まれた。皇帝への限りない賛嘆が改めて捧げられた。詩。

汝は零^{こぼ}せり、バフマン(Bahman)月⁽⁷²⁾が木の葉を撒き散せりと

立ち上がって花園を見よ、バフマン月は退散せり

天空の雷鳴に耳を傾けよ、これぞ即ち天上太鼓の音

花嫁がこの世に来れり、花樹園が持参金(果物)付きでやってくる如く
帝国の熟達した画家たちは、装飾の魔術によって宮殿を見事な光景に作り上げていった。彼らは選び抜かれた手法でもって、その礎をさらに強固なものにした。イスファンダーラムズ(Isfandārmuz)月⁽⁷³⁾ 25日(1584年3月6日)、マリヤム・マカーニー皇太后の御下命によって、ファトフプール(Fathpūr ファテプル・シークリー)から4コース(約14.5キロメートル)離れた緑豊かな清々しい皇帝の庭園において、懇親のための宴会が催された。そしてかなりの人数の淑女たちがこの心地よい饗宴の場(nuzhat-gāh)⁽⁷⁴⁾に参加した。(ここまでは『アクバル・ナーマ』のペルシア語原文をそのまま引用。次の文章から再びウルドゥー語の記述に戻る)。ここでは、この年サリームの結婚式のあることを暗示している。

かのムッラー・サーヒブ(バダーウーニー)が途切れることなく綿綿と綴っているように、私アーザードもまたここに立ち止まっていることはできない。アブル・ファズルの霊にしばらくの間宥恕を願い、公正な判断をする人々に次のことを伝えておきたい。すなわち、アブル・ファズルは各

人の長所のみならず些細な事柄に対しても厳格な取扱いをしている、ということである。彼は疑いなく言葉の両替商(ṣarrāf-e suḵhan)⁽⁷⁵⁾であった。彼は一語一語をよく吟味した。だが私が驚嘆を禁じえないのは、四六時中アブル・ファズルは兄ファイジーに対して親愛の情を抱いていたことである。彼らは各自の作品に対する相互の意見にそれぞれ耳を傾けていた。また自らの作品に対してもよく自己点検していた。それにもかかわらず、バダーウーニーは自分の書物のなかで次のように述べている。『『アクバル・ナーマ』の書かれたころ、帝国のさる大官が私に言うには、皇帝はナガルチーン(Nagar-chīn)⁽⁷⁶⁾の町を開発した。貴殿も『アクバル・ナーマ』と同じやり方でこの町の建設(497)の様子を記述してみてもどうか。この件について半ページばかりの記述をしてみないか』と。バダーウーニーはこの大官についても、自著『諸史選粹』のなかで言及している。自分の作品(βeṭā)が何人の眼なんびとから見ても一見して美事な出来のものと映るに違いないと思ひ込むのは、誰しも避けられぬところである。バダーウーニーの著作には、確かに傑出したところがあった。ほんやりした薄明のなかでは⁽⁷⁷⁾、差異が判然とししないのは当然である。一方、『アクバル・ナーマ』の手法は、次のようなところにその特徴がある。主題の多様さ。叙述の雄渾さ。表現の流麗さ。同義語の夥しさ。種々の出来事とその論拠並びに証拠の開示。反対派の見解のなにほどかの紹介、等々。こういった内容が次々と重疊的に展開されているのである。まるで、引いた途端に飛び出すカヤーニー朝(ペルシア古代の伝説的王朝)の弓のようである。アブル・ファズルはこの弓を見習って〔次々と鋭い筆鋒を繰り出し〕たのだ。他方、バダーウーニーの方は一体いかなる時にあのように書くことが可能であったのであろうか。彼は安座したまま風刺的に述べたまでのことであつた。そして最後の詩に至るまで、それに魂⁽⁷⁸⁾を吹き込んだのである。ご存じのように、バダーウーニーも詩を作っているが、その詩は神への賛嘆を刻み込んだ指輪にルビーを嵌め込んだようなものである。だがそれにしても、バダーウーニーがこうした叙述法を自分の書物のなかで採ることによって、自らの尊厳を傷つける一体どのような必要性があつたというのであろうか。

[原注：以下バダーウーニーの記述]⁽⁷⁹⁾。この年、ナガルチーンの町の

建設が始まった。帝国の大官の一人は、『アクバル・ナーマ』が編纂されたとき、この件に関して数行の記述を書き留めるよう私奴(faqīr バダーウニーをさす)に求めたことがあった。その時に書き留めた記述をそのままここに引いておくことにする。世界の都市、とりわけインドの神殿の建設遂行者である創造の工房の建設者(アクバル)は、幸運に満ちた偉大な君王たる自らの抱く構想に基づき、次の対句にあるように、原初以来の天然の規範の創造的発展を行なっていくよう命じた。

君主は知れり、この世を統べれば

一処を破断し他処に種蒔くことを

旅程の各路、並びに大地の土地柄にとって、温和な大気と広大な野原、清涼な水、平準な平野が存在すれば、皇軍の名誉ある駐屯所の建設地となり、魅力ある行宮の建設地となろう。また心地よい旅程と甘美な水に恵まれ、身体健康状態の持続、並びに学問への精通と神への礼拝によってまさしく可能となる人間の気質の節度ある抑制が期待できる。とりわけ、例えば行幸や狩猟その他のような各種の国益にかかわる場合は、なおさら有益となる。このような訳で、瑞祥のあったこの年、マールワ(Malwa インド中部地方)への遠征において皇軍が勝利し帝国の敵共を征服して帰還した後、世界の修飾者(アクバル)の考えに次のような先見の明ある高潔な願望が生じた。すなわち、アーグラから1ファルサングに位置するカクラウリー(Kakrauli)⁽⁸⁰⁾は、水の美味さと大気の清浄さで他の多くの地を超絶しており、帝国の随員が野営したり不滅の幸運が逗留したりする際、そしてまた都城への出入に伴う困憊を壁け、功業に満ちた高貴な精神に安らぎを与えんとして、幸福の刻み込まれた時々をあるときはポロ競技に、またあるときは猟犬の競争や各種の動物の飛行競技に費すのに適している、と。そこで、壮大な礎石の上にこの町を建設することこそは、不滅の国都建設の堅固な礎の吉兆となり、栄光と繁栄の増進の予兆でもあると考えられて、この件に関する厳格な勅令が次のように厳かに発令された。すなわち、宮殿近くに侍ることを容認された者たち、並びに恩寵に浴することを賜った者たちは誰でも、進んでこの瑞祥の地に(498)見事な建物にしてかつ秀逸な外観を有するものを建立するために着手せよ、と。かくして短期間のう

ちにかの快適な地の近辺は、神の影(zill Allah)なる御方(アクバル)より来る恩恵の光を浴びて、世界に連れ添う新妻のほくろ(離宮)となった。この地には、アムナーバード(Amn-abad 平安の地の意)に由来する地名であるナガルチーンなる名称が付けられた。対句。

おお神よ、渴望してやまぬかの絵図が

幸運の帳と(帳)のうしろの神秘より現われ出づ⁽⁸¹⁾

バダーウーニーはあいまいな言い回しで書いている。〔ナガルチーンに離宮を造営するよう〕要望したのが誰であったのかを明らかにしていない。おそらくアーサフ・ハーン⁽⁸²⁾かクリーチ・ハーン⁽⁸³⁾であろう。高官たちのうちのこれら2人の会合に、アブル・ファズルは時々加わることがあった。あるいはアブル・ファズル自らがそれを要望したとしても、それはありえないことではなかった。彼もまた信頼を勝ち得るのが上手であった。事をなすには潮時です、何かをなしてお目に掛けて下さい、と言ったかもしれないのだ。アクバルはほどなくして、かの場所が気に入ったのであらう。半句。

そうです、カリフもまたご覧になることでしょう、あなたの壮举を

こうした事柄があったにもかかわらず、かの雄弁の大河⁽⁸⁴⁾を初めから終わりまで目を通した人が、岸辺に立って見渡せば、次のことがはっきりするであろう。すなわち、その大河の水源近くでは河水の清さや心地よさが相当あり、20コース下ってきてもまだかなりあり、そこまでの中間にもあり、その先にもなお河水の清さや心地よさは存在する。それは、その時その時に求めるものがたまに一致していたからである。新たな施策がなされれば、それに対応するしかじかの修正が必要になってくる。〔その修正を果たさなかったバダーウーニーの方に〕手落のあったことは、彼の記述が改訂に値するものであったことを物語っている。この言葉の船(jahāz-e sukhān 諸史選粹をさす)の船長(著者バダーウーニーをさす)はきっとこのことを理解していたことであろう。もし彼が〔アクバルに対して〕生涯忠誠を尽くしていたならば、初めから終りに至るまで同一の歩調で歩んで見せたであろうことは、異とするまでもない⁽⁸⁵⁾。

『アクバル会典』

『アクバル・ナーマ』(大構想)の第3巻に当たる『アクバル会典』は、ヒジュラ暦1006年(1597/1598)に完成した。この書に対する賞賛は、いくら述べても述べる限りでない。なぜなら、あらゆる工房や組織の状態、歳入と歳出の状態、あらゆる職種の規則と法令が記されており、つづいて帝国内各州の状態、各州の周辺の境界、各州の地積、さらに各地の簡潔な歴史的説明、次いで各地の収支状態、天然的並びに工業的生産物など、またその地の有名な場所、有名な川や水路ないし運河、その地の泉の水源と流路およびそれがもたらす恩恵、危険場所と被害発生時など、さらに軍隊とその管理、高官たちの名簿と宮位、役人たちの種類、宮廷役人たちと一般役人たちの職種、学者たちの名簿、ウラマーとスーフィー聖者たち、音楽家たち、工芸家たち、敬虔なファキールたち、苦行者たち、墓廟とヒンドゥー寺院の詳細な説明並びに現状、ヒンドゥスターンに特徴的な物品の説明、インド人(ahl-e Hind)の信仰、インド人の学問、その他多くの事実と問題がこの書には収められているからである。

(499) こうした諸項目は、政府刊行物を参照できるようになった現代の人々には注目されないかもしれない。今日では小さな県の政務官代理(dipṭī kamishnar, deputy commissioner)ないし土地査定官たちの方が、ここで記されていることよりもかなり多くの事実を赴任県の年次報告書のなかで報告している。しかしながら、もっと広い見方をしている人で前後に等しく関心に向けながら、しかも世の中の事業の進行を時々刻々監視している人、そういう人には、あの当時(アクバル時代)こうした一連の項目について考え、整理し、そしてそれを敷衍し、さらに完成した形に仕上げていくことは、まさしく一統きの作業であったことがよく分かっているはずである。実践することがほかでもなく、一語一語についてどの程度まで血を滴らさざるをえない〔ような苦勞を伴うものであった〕かを認識することであった。今日では、このつながりは目に見える形となっている。〔何も苦勞して深みで渡河しなくても〕河(目標)は浅瀬で渡ることができる。渡河を望

むなら、渡っていけばよいだけなのだ。

先に触れた諸問題の探査について注目してみよう。そうすれば、この知識の宝庫がどこで作り出され、どのような土が^{ふるい}篩にかけられて微細な粒子が選り分けられ、この黄金の山(『アクバル会典』)が築き上げられたのか、というアブル・ファズルの有した知性が驚くほどはっきりしてくるであろう。一つの些細な点に注目していただきたい。全世界を通例の如く7つの気候帯に分けて、アブル・ファズルもまた新たな探査について書いている。そのなかで彼は次のように述べている。西洋人(ahl-e farang)の旅行家たちは最近新しい島を発見している。そしてその島に小世界(choṭī dunyā)なる名称を付けた⁽⁸⁶⁾。この島が、その当時コロンブスによって発見されたアメリカ(Amrīka)を意味していることは明らかである。だが残念ながらこの書(『アクバル会典』)にとって不運なことに、かの博学の士⁽⁸⁷⁾は何か難儀さあつての故か、土煙を立ててしまった⁽⁸⁸⁾。

『アクバル会典』の文体について何も述べずに先へ進めば、公正の法廷において有罪の判決を受けることになる。そのためには、少なくとも次のように言うておくことが適切であろう。この書のなかには、非常に短い成句や倒置句、新しい流行語があり、それについての数語の美辞麗句を含む文章がある。真摯に取り組まれたこの書の各ページは芳香を放ち、各紙面からは靈気が湧き立っている。余分な言葉が用いられることは、ありえない。直喩も隱喩も全くない。関係符号(izāfat)が二重化して使用されるようなことがあれば、ペン先はへし折られよう。明解、達意であることにとりわけ留意されている。凝った文体による修飾や誇張、高慢さは全くない。

このようなスタイルは、拝火教徒の人々がハーन्दーシュ地方からザンド(Zhand　ゾロアスター教典注釈書)およびパフラヴィー語関係文献をもって〔アーグラに〕やってきた際に、アブル・ファズルはそれらから採り入れたものであろう。彼が自分のなす叙述にアラビア語を全く用いないことに何ら後ろめたさを感じなかったことは、疑いのないことである。彼は叙述のスタイルや方法⁽⁸⁹⁾、その他はペルシアの古い書物から取り入れていた。このような叙述の進め方は、アブル・ファズルにとって全く正当にして適切な方法であった。なぜなら、もし純粹のペルシア語(Fārsī-e

khaliṣ イスラーム化以前のペルシア語)が禁止されたならば、書籍は難解になって辞書に依存せざるをえなくなったであろうからである。今日誰もが書物を読んで堪能しているが、こうした事態は一体いつから可能となったのであろうか。要言すれば、アブル・ファズルの書いたものは実に見事に書かれているということである。彼は自らの叙述方式によって自分自身が(500)創始者であり、かつその方式の推進者であった。これ以降、このような方式で書くことは誰にでも可能となった。驚くべきことである。『アクバル会典』の結語を書きながら、著者はあるところで力を込めて実に楽し気に述べ、かつ真実を語っている。

不可思議な数多の物語は我が著述の上に飛来し

二、三の言の葉よくぞ書けるやと世人は困惑す⁽⁹⁰⁾

『アクバル・ナーマ』『アクバル会典』 批判について

アブル・ファズルの諸作品を読んで鮮明な印象を受けた人々は、口々に次のように述べている。アブル・ファズルはアジアの名文家(inshā-pardāz)たちのうちで誇張法を重用する最大の作家であった、と。彼は『アクバル・ナーマ』と『アクバル会典』を書く際に、ペルシア語が古い時代から有していた適合力を新しく蘇らせた。彼は饒舌な修辭とばかでかい宮殿の帳によって隠されているアクバルの美点を、衆目の前に浮き立たせた。またアクバルの短所も同様にして隠されている。その結果、両書を読み終った後には、称賛を受けた者(アクバル)並びに称賛を行なった者(アブル・ファズル)の双方に対して嫌悪感が生じてくる。そして双方の人柄と性格に対して汚名がきせられることとなる。しかしながらアブル・ファズルは大学者であり、知者であり、賢者であり、指導者であった。この世で活動を行なっていく上に必要な知性は、彼の内に必然的に備わっていた。

私アーザードをして言わすれば、アブル・ファズルの表現と文体に多少とも接したことのある者たちが口にするこも、ここに述べたような事柄である。しかしながらアブル・ファズルはそうせざるをえなかったのだ

あった。なぜならペルシア語の様式(dhang)は、600年来(10世紀以来アブル・ファズルの時代に至るまでの間)まさにこのように伝えられていたからである。それを改革しようとしても、その改革には多くの修正の圧力が加えられ、また弊害は依然として維持されてきていた。それにもかかわらず、専門の言語学者たちや言語の奥義を把握した人々、言語の形体とニュアンスに通達している人々は、アブル・ファズルの言説やその飾り立てた表現について、これまでにあれこれ指摘されたことが全く問題とはならないことをよく承知しているのである。根本的な真実を提示すること、並びに名文の名鑑を掲げること、これが他ならぬアブル・ファズルの仕事であった。あらゆる事柄を「包み隠すことなく」語り伝えることもまた彼の仕事であった。止むをえず語らなかつたことは、彼が何も知らなかつたことであり、従ってそれはまた現在に至るまで理解されていないことなのである。追従ごとに私たちが同意している訳ではない。さまざまな言語で書かれた歴史書は存在するが、そうした歴史書にあって国王への御機嫌取りや民族の擁護に全く係りのなかつた歴史家は存在しない。アブル・ファズルは主君から受けた恩義を忘れぬ忠実な臣下であった。他ならぬこの主君(アクバル)の公正さによって、彼の一家の名誉と面目は救われた。この主君の保護によって、一家全員の生命は守られた。この主君のお陰で、彼の受けた恩恵と奇跡は価値を獲得した。この主君の評価によって、彼は帝国の柱石となった。この主君の後ろ楯があつたお陰で、彼の数々の著作が生まれ、それらの著作物並びに著者自身が数百年に及ぶ寿命を賦与されたのであつた。彼に対していわれる追従とは一体どんなことなのか。彼は心中祈り続けていたことであろう。そして彼の生命は悶え苦しみながら道中の土埃となって立ち昇っていったことであろう。彼は実によく礼節を弁え、感謝の気持を相手に伝えた。人々はそれを追従と称したのである。ところで追従がもたらす賞賛とは一体何なのか。そしてまた追従がもたらす罪とは一体何なのか。今日の人々がアブル・ファズルの立場に立っていたとしたならば、彼よりも千倍も多くの無駄口を叩き、しかも彼が果たしたように事を為すことは全くできないことであろう。とはいえ、アブル・ファズルのこのような運命は一体どこから来たのであろうか。確かにそれに関す

る事柄が一点ある。彼はインドにずっといたまま、アジアの(501)諸学とアラビア語およびペルシア語を完全にものにし、その結果アクバルの重臣となった。読者諸賢も同様に目下の英語を完全にものにし、並み居る者共を退けて、かつてムガル朝皇帝がいた宮殿に勝ち昇ってみられよ。そうすれば諸賢がどの程度の作家であり、どんなものを書いているかが自ずと明らかとなってこよう。私の友人をご覧いただきたい。彼はかつてはムガル帝国のもとに勤めていたが、現在はニザーメ・ムルキー王国(ハイダラーバード藩王国)の重臣たちのために八方手を尽して策略と便宜を弄している。もしあらゆる事柄が事実と真正さ、偽りなさに基づいて書かれていれば、今ではかの王国は混乱に陥っていることであろう。人々の識字は進んできた。出過ぎたおしゃべりが始まっている。他人のことを理解せず、口から出まかせを言っているのだ。

アブル・ファズルの後、アッラーマ(‘Allama 大学者の意)の称号はシャージャハーンの財務長官であったサアドゥッラー・ハーン(Sa‘dullah Khān)⁽⁹¹⁾を除いて誰にも与えられなかった。アブドゥルハミード・ラーハウリー(‘Abd al-Ḥamid Lahaurī)は『シャージャハーン・ナーマ』⁽⁹²⁾においてペルシア使節の事情について記し、シャージャハーンのもとでサアドゥッラー・ハーンが起草した1通の書簡が用意されたと述べている。その書簡の下敷となった元の文章も書き写し出されると、それは何とアブル・ファズルの書いた書簡の写しに他ならなかった。書き出しの部分も、その冒頭からそっくりそのままに書き起こされていた。言葉遣いの華やかさもそのまま用いられていた。構文の組み立ても[アブル・ファズル同様の]同義語が多用されていた。しかしながら、これがこの世の慣わしである。言ってみれば誰か新しい思潮の先駆けとなる若者が歩き出し、2歩進んで倒れ、起ち上がって4歩進んで座り込んでしまう、というようなものである。また熟達(じゅたつ)の師が何冊もの書物を書いて道を示すといったことも、こういう場合には起こりえた。さて、上に述べた先駆けの若者を見よ。彼は[倒れても]先へ先へと進み、遠くに立ち去っていく。思考の飛翔に疲れることもなく、さりとてペン先を磨耗させることもなく。

ここでアブドゥルハミードの場合について触れてみよう。ムガル帝国

(salṭanat-e Chaghta'īya)のシャージャハーン時代の統治は、剣とペンの力による高度の統治が顕著であった。学者たちの他あらゆる学芸の熟達者たちがシャージャハーンの宮廷に集まっていた。皇帝は自分の治世時代の成果が書き残されることを承認した。現下の最高の名文家は誰であるか、探索が行なわれた。何人かの推薦のために貴顕たちが推薦演説を行なった。気に入った人物はいなかった。アブドゥルハミード・ラーハウリーは、彼がアブル・ファズルの弟子であったという理由で推薦された。この人より望ましい人物として誰がありえようか。アブドゥルハミードは何がしか自分の心中の様子を見本として書き上げて上奏した。皇帝拝謁の機会をえて彼が承認された。文書担当の勤仕が彼に委ねられた。アブル・ファズルの弟子であった老残の身の者が、シャージャハーン時代に生きておればどうなるかということは、これによって明らかである。しかし僅かばかりの部分を書いて、彼は毫碌してしまった。残余の部分は別の者たちが書き上げた。ここまで何がしか述べてきたが、ここで述べておくに値することは次のことである。すなわち、弟子であることと師匠の教えを体得することとは全く別物である、ということである。『シャージャハーン・ナーマ』に見られる文飾、華美の横溢、万花の撒き散らし、護民官風の派手好み、同義語成句の繰返し、ミーナー・バーザール(mīnā-bāzār)⁽⁹³⁾への執着、花押で飾られた書簡、等々。しかしながら、これによって『パードシャー・ナーマ』(『シャージャハーン・ナーマ』)は『アクバル・ナーマ』のスタイルと一体どんな関係があるというのか。

(502)アブドゥルハミードは感性豊かで泰然とした名文をよくし、多彩な言葉を選りすぐって用いた。そして華やかな成句を使って月並み調に飾り立て、それに意味を込めようとした。そうした修辞法で一体何が語られようとしているのか。彼が用意した園亭に、バラとヒヤシンスを持ち込めば色彩は色褪せし、鸚鵡おうむとサヨナキドリが飛来すれば羽毛は焼き焦げてしまうことになろう。そこには確かに哲学と明知を備えた名文が見られる。説明や話題のためにアブドゥルハミードが行なった天上的なものの記述は率直である。そして哲学的観点から精査し、筆力に富んだ言葉によって書き上げている。彼の筆力に富んだ言葉は、その言葉が自ずから求める用語

(lafz)を用いて表白されたものであった。その言葉によって、また次のようにも表白されていた。今日までに耳にしてきたことは首肯できるものである、私たちはいくつもの成句を繰り返し学び堪能している、と。それらの成句のいくつかの傑出した型と奇抜な複合語とは、一見の値打ちがある。僅か数語の後とその前とでは、意味するところに天地の開きをもたせるのが、アブドゥルハミードの腕の見せどころである。こうしてこしらえ上げた下地を踏まえて、彼は生起した事柄の在り様を陳述している。曰く、心は次第に受け入れるようになっていたとか、発生したこの事件は時代の情勢が要請したものであったとか、こうして事は起こりそれに従って結果が生じた、なぜならその下地の上にかの結果は生じたのだから、云々と。

『アッラーミー書簡集』

これはまたの名『アブル・ファズル名文集』とも呼ばれている書であって、モスク付設の学校や塾において広く知れわたっている。この書は3巻から成っており、これら3巻はアブル・ファズルの甥で後に義理の息子となった人物が編纂したものである⁽⁹⁴⁾。

第1巻には書簡が収められている。それらは皇帝アクバルからイランやトゥーラーン(トルキスタン)の王たちに宛てて書かれたものであった。また勅令も収められていて、これらは帝国内の高官たちに宛てて発給されたものであった。表現のもつ威厳、修辞の豊富さ、成句の洗練性、主題の高邁さ、言語の透明さ、語勢の力強さが海の逆巻きとなり、その逆巻きが洪水のように押し寄せてくる。そして帝国の意味するところ、その国家的目標、目標の哲学的根拠などが示されている。将来に諸結果をもたらすすべての前提条件は、まるで一つの世界を構成しているかの如くである。そのために、書簡受領者は皇帝の本物の姿の前に〔いるかのよう〕に頭を垂れて立つこととなる。書簡ではまた、言葉がその意味と用法において最も適したところに用いられている。かのアブドゥッラー・ハーン・ウズベク(‘Abd Allah Khan Uzbek)⁽⁹⁵⁾が口に出した言葉は、アクバルの剣の方はさほ

どでもなかったが、アブル・ファズルのペンには恐れをなしていた、というものであった。

第2巻にはアブル・ファズル自身の書簡が収められている。それらは高官たちや友人たち、その他に宛てて書かれたものである。これらの書簡が書かれた意図はさまざまである。そのためにハーニ・ハーナーンやコーカルターシュ・ハーンその他に宛てて書かれたものは第1巻の雰囲気を帯びているが、残余の書簡は第3巻で示されている考え方と連続している。先ず第1巻、第2巻双方について、これだけのことは言うておく必要がある。すなわち、誰もがこれを読んでおり、教師はこれを教えている。また学者たちは〔この書に関して〕イスラーム法の注釈を書いている。けれども、〔そうした教育や注釈の生きた〕効能は一向に現われていない。〔学生たちにとって〕歓びは次のような時にこそ起こってこよう。近くは(503)バーブル、フマーユーン、アクバルの歴史、遠くはサファヴィー朝諸王下のイラン史、それにアブドゥッラー・ハーン治下のトゥーラーン史を学校で学ぶより早く知るときであり、インドのヒンドゥー諸王の存続と彼らの慣行について知るときであり、またムガル朝宮廷と皇族たちの出来事および彼ら相互の此細な事柄について詳しく分かる、そういうときにこそ起こってこよう。教えを受ける者が嫌でも応でも本を隅から隅まで読まねばならぬ、というようなことは願い下げだ。さる盲人が博物館をぐるっと再訪してみたが何も気に入るものがなかった、という話があるではないか。

第3巻には、アブル・ファズル自身の何冊かの著書に付した序文や、古い時代の幾人かの著者たちの作品のなかから選んだ書物に対して何ほどか自分の考えを述べたものが含まれている。それらの描写は散文調でなされている。当時は批評(rewīw 英語のreviewの写し)といった名称さえ、アジアでは知られていなかった。300年前にこの批評の域にまで達していたアブル・ファズルの批評家的精神は注目に値する。彼はあちこちの箇所では理性に高い地位を与え、天性の解放や精神の自由を尊重した。そうした精神の自由のもとで、宗教と現世に対する嫌悪があった。それにもかかわらず彼自身が、思想に対して高邁な矜持をもった一種の世界都市(‘alamabad)であった。アブル・ファズルは、自分と兄のファイジーとの2兄弟

は無神論者(dahriya)であった、と図らずも述べている。彼らは懷疑論者(bad-mazhab)であった。そのように彼を見てみると、何としたことであろう、この立場はジュナイド・バグダーディーが明らかにしていた立場でもあった。そしてまたシャイフ・ジブリーの立場でもあった。一体、神を知るとはどういうことなのか。この第3巻の愛読者となって、哲学とともにイスラーム神秘主義(ṭaṣawwuf)および照明哲学(ḥikmat-e ishraq)にもよく通じるよう読者諸賢にお勧めする。そうすれば愉しみも湧いてこよう。さもなくば、食事を取ろうとして一口嚙んでみたとして、お腹は膨れもしようが、味わいはさっぱり駄目ということになろう。

この第3巻には、何冊かの抜き書き帳に書かれていた〔彼の筆になる〕いくつかの序文が収められている。またこの書のあるところでは著名な詩人たちのなかから自分の気に入ったいくつかの詩句を書き出しており、あるところでは何冊かの書物のなかの表現あるいは歴史的伝承に興味を抱いてそれらを記しており、あるところでは真珠のようないくつかの韻文や散文のなかから自分の気分によって漏れ落ちていたものを採録しており、あるところでは勘定書(ḥisab-kitab)の記録を書き残していた。残念なことながら、こうした宝石のかけらは現在どこに残されているのであろうか。いくつかの書物には彼の結語が書かれていた。それらの書物には彼の意見が書き加えられていることもあった。そしてその最後のところに、これはしかじかの日付の時斯く斯くの場所において記された、と書き加えられていた。明白なことは、今日我々がそれらの宝石のかけらを目にすることによって得られるはずの諸事情が、アブル・ファズルにとってはその当時自明のことであった、ということである。文書類は時としてラホールで書かれ、あるものはカシュミールで書かれ、またあるものはハーन्दーシュで書かれる、といった有様であった。これらを読むことによって、我々は次のような事柄について確かな考えを抱くことができるはずである。すなわち、ラホールはその当時どのような世の中であったのだろうか。アブル・ファズル自身はそれを執筆中ラホールでどのように身を処していたのであろうか。アブル・ファズルとファイジーの2兄弟はカシュミールとその近辺を2度訪れていたが、どこかの場所について彼らは特別の記憶があったのかど

うか。そしてその地を珍奇な世界だとするような考えが彼らの心によぎったのかどうか、といった事柄である。〔原注：アミール・ハイダル・ビルグラミー（Amīr Ḥaidar Bilgrāmī）は『アクバル時代の諸事件』（*Sawā nih-i Akbarī*）⁽⁹⁶⁾のなかで、アブル・ファズルの『書簡集』が4巻から成っていたと述べている。誰も知らぬ第4巻は、一体どうなったのだろうか。〕

『イヤーリ・ダーニシュ』

これは『カリラとディムナ』（*Kalīla wa Dimna*）⁽⁹⁷⁾なる書である。元はサンスクリット語で書かれたもので、この地インドからアヌーシールワーン（Anūshirwān ササン朝ホスロー1世の称号 在位531-579）がペルシアに取り寄せた。（504）この作品はかの地で長い間、当時のペルシア語（中世ペルシア語）で流布していた。アッバース朝時代（749-1258）にバグダードに伝わり、アラビア語に翻訳された。サーマーン朝（873-999 中央アジアを主にしたイラン系王朝）時代、ルーダキー（Rūdakī ペルシア詩人、940年没）がこれを韻文に翻案した。その後多少形を変えて、フサイン・ワーズ（Ḥusain Wā'iz）の翻訳によって、この作品はペルシア語の衣装をまとうことになった。そして再び自らの祖国ヒンドゥスターンに戻ってきた。アクバルはこのペルシア語版を目にして、次のような考えが浮かんだ。元のサンスクリット語版が手近に存在するのであるから、それと照応させることは容易なはずである。それに問題のこの書は、数々の教訓を収めているという点からして、身分の高下を問わず多くの人々に役立つものである。この書は、誰もが理解できるような文体で書かれるべきだ。『アヌワリ・スハイリー』（*Anwār-i Suhailī*）⁽⁹⁸⁾は用語と隠喩に技巧を凝らし、晦渋になっている、と。そこでアクバルはアブル・ファズルに、元のサンスクリット語版を手元に置いて翻訳し直すように命じた。アブル・ファズルは数日のうちに翻訳を完成させ、ヒジュラ暦996年（1588）に跋語を書き終えた。彼はまたその跋語のなかで、〔自分に向けられた〕賞賛が有する真実味溢れる精神は喜ばしいものだ、とも述べている。

バダーウーニーはこの件に関しても自分の書のなかで一撃を加え、次のように述べている。アクバルの数々の命令は、現状に苦情を呈しながら命じているものである。つまりアクバルはイスラームのことごとくに嫌悪感を抱いており、イスラームの諸学にもうんざりし、イスラームの言語(アラビア語)を好まず、アラビア文字も好きではない。フサイン・ワーイズは『カリーラとディムナ』の翻訳書名を『アヌワーリ・スハイリー』とし、見事に書き上げていた。目下のところアブル・ファズルに命令が下され、この作品を分かりやすく飾り気のなりベルシア語で書くように命じられた。書き直されたこの作品には、隠喩もなければ直喩もなく、アラビア語の語彙も含まれないことであろう、と⁽⁹⁹⁾。

仮にバダーウーニーの考えがアクバルに関しては本当のことを述べたもののだとしても、かの序文(muqaddama)を特によく読んでみると、アブル・ファズルに対して至る所でなされている非難は見当外れであるということが出来る。アブル・ファズルおよび彼の父や兄が獲得した荣誉栄達のための何れほどの源泉は、まさにこのアラビア語の学問であり、アラビア語そのものであったということは明らかである。アブル・ファズルがアラビア語とその学問を嫌悪することは、ありえないことである。確かに彼は自分が仕える皇帝アクバルの忠実な僕^{しもべ}であった。彼は自分にとって何が得策であるかをよく承知していた。そして主君と僕の立場をよくわきまえていた。もしアブル・ファズルがアクバルの命令を衷心実行しなかったならば、何とまた恩知らずな者ということになるし、神に一体どんな申し聞きができるというのであろうか。アクバルの下した『カリーラとディムナ』の翻訳命令から、[アラビア語とその学問への]嫌悪というような帰結をどのようにして引き出すことができるというのであろうか。[安易な推量によって]一つの難問を体よく解きえたとしても、それによる冒瀆は一体どうなるというのか。バダーウーニーの手元にはペンがあるので、どうしても書くことができる。彼もまた自分の著作の王国のなかでは皇帝アクバルなのだ。書きたいと思うことを書けばよい。

『ルクアーティ・アブル・ファズル』⁽¹⁰⁰⁾

これはイギリス風の用法では私的〔原注：プライヴェートな〕文章と呼ばれるスタイルの書簡集である。一つひとつの文章が読むに値するものである。これによってアブル・ファズルの個人的事情や心底から生じた考え、家庭の出来事などが明らかとなる。またこの時代の歴史的状況や人々の些細な事柄についてよく通じることができ、それによって当時の人々の楽しみがどのようなものであったのかということが明らかとなってこよう。

私はこれまでに(505)アブル・ファズルを評価して、あるときは彼がシャイフ・シブリーであると述べ、あるときはジェナイド・バグダーディーであると述べたのだが、驚いたことにその彼がハーニ・ハーナーンについて、しばしば記述を行なっていることである。私はそれを読むと恥じ入る思いのすることがある。しかもその一方でアブル・ファズルが書簡集第1巻のなかで、ハーニ・ハーナーンに対してアクバルの勅令を代筆した際には、精神(dil)と生命(jān)並びに氣息(dam)と意識(hosh)を傾倒する旨の好意を示す記述を行なっていたのである。第2巻でもアブル・ファズルは自分の方から書簡を書き送り、そこでも同様の好意を示す記述を行なっていたことが分かる。だがバイラム・ハーン(ハーニ・ハーナーンの父)の影響はどうだったのか。確かに母親(バイラム・ハーンの妻は夫の死後アクバル宮廷に興入れした)の愛情いっぱい張った胸からミルクが溢れ出ていたことは間違いない。それでもハーンデーシュでハーニ・ハーナーンが皇子ダーニヤールとともに遠征活動を行なっていたとき、両者は〔形の上では義兄弟であったにもかかわらず〕自軍を率いて周辺地域をうろつき回っていた。両者はあるときは近距離間を互いに行き来し、あるときは突然離れ合ってしまった。そして為すことといえば互いに相争うことであった。ハーニ・ハーナーンはハーンデーシュから何通かの上奏文^{したた}を認め、アクバルとその母(皇太后マリヤム・マカーニー)、アクバルの皇子たち、とりわけサリーム即ち後のジャハーンキールに懇願していた。この書簡集のなかで、アブル・ファズルはハーニ・ハーナーンに関してか

なり多く書き残している。そしてあれこれの考えを述べたなかで、最も大事な点を次のように述べている。「我が知性は困惑して次のように語る。聖者ジュナイド自身にしても〔私と〕同じ考えであり、聖者バーヤジド (Bāyazīd)⁽¹⁰¹⁾ 自身にしても〔私と〕同じ意見である、と。私は両聖者の言葉のなかからいくつかを書き写し、この書簡の末尾でお見せすることにしよう」と⁽¹⁰²⁾。(未完)

おわりに

本誌第5号に小稿の初回分を發表して以来、すでに2年が経過した。初回にも記したが、小稿中の括弧類の使用法について再度記しておくことにする。まずパーレン()は原語の表記や簡単な説明、言い換えのために用いられている。キッコー〔 〕は原文にない補足語を追加した場合に用いられている。さらにブラケット[]は原文中にときたま認められる括弧内に表記されたアーザードの原注を示すために用いられている。アブル・ファズルの殺害について、原文は「アーシル城塞征圧」の小見出し中で扱っているが、本稿では「アブル・ファズル謀殺」の小見出しを新たに設けることにした。

アーザードの父ムハンマド・バーキルはデリー最初のウルドゥー語紙『デリー・ウルドゥー・アフバル』の発行者であったが、1857年の大反乱勃発後に刑死したことは初回到述べておいた。その後イルファン・ハビーブ教授の新著を読んでいた際に、新たな史実の教示をえたのでここに紹介しておきたい。このウルドゥー語紙は週刊新聞で、ムハンマド・バーキルはその編集者であった。反乱勃発後1ヵ月余を経た1857年6月21日付の同紙に「この好機を逃すな」と題した社説を發表し、反乱を支援していた。しかし同年9月、デリーが再びイギリス側の手に落ちると、彼は捕えられ即決判決で処刑されてしまったのだった⁽¹⁰³⁾。この当時アーザードはすでに20代の青年となっており、彼も同紙の刊行に種々協力していたはずである。

大阪大学世界言語研究センターの山根聡教授から2010年1月と2月にいただいた書簡によって、同年1月20日、21日の両日ラホールのパンジャブ大学オリエンタル・カレッジにおいて「文学者アーザード没後100周年記念セミナー」が開催され、アーザードと同名の曾孫ムハンマド・バーキル氏が出席されていたこと、また曾祖父から引き継がれてきた手書き原稿や写本類はパンジャブ大学図書館に寄贈されている、ということを教えていただいた。さらにアーザード没後100周年を記念して、パンジャブ大学アーザード文庫所収のペルシア語、アラビア語、ウルドゥー語写本の総合目録、並びにアーザードが著わして没後の1924年にラホールから出版されていたウルドゥー語－ペルシア語対照辞典の新訂版が、いずれもオリエンタル・カレッジより刊行されたことも教えていただいた⁽¹⁰⁴⁾。これらの2書は、山根教授が2010年4月にラホールから将来され、私も恵贈に与った。山根教授のこうした数々の厚意に対し、ここに深く感謝申し上げる次第である。なお、上記のアーザード文庫総合目録の中扉には、彼の生卒年が1830－1910年と記されていることをここに付記しておく。

今回は前回以上に紙数を費やすことになったにもかかわらず、アーザードのアブル・ファズル伝を完結させることができなかった。次回において、僅かとなった残余の部分の完了させる予定である。

注

- (1) 当時アクバルはデカン情勢打開のため、1600年の春以来、デカン地方への出入りを扼す要衝ブルハンプルに滞在していた。
- (2) アクバルが採用した太陽暦のペルシア暦では、春分の日が元旦とされた。その日から一週間、朝野で新年祭が盛大に祝われた。
- (3) この詩句は*Akbar-nā ma*, text, Ⅲ, p. 769, English tr., Ⅲ, p. 1149 に収められている。
- (4) ハーンデシュ王国のアーディル・シャー4世で、バハードウル・ハーンの父。在位1578-1597年。
- (5) この対句はウルドゥー語で書かれている。アーザードの作か。
- (6) サトブラ山脈の山脚(突出部)に築造された城塞。海拔700メートル、平地

より270メートル近く高いところにある。城が築かれている山頂部には約24ヘクタール(24町歩)の平地があり、貯水場や溜池によって十分な水がまかなわれる。山頂に至る道は2ヵ所あるが、それ以外のところは約25メートルから35メートルに至る絶壁に囲まれている。ここに強固な城壁を巡らし、食糧と武器・弾薬を貯えれば、守備隊を配置して10年間の包囲攻撃に耐えられるといわれた。

- (7) ゴーダーヴァリー川の上流に位置するナーシクは、グジャラート王国の保護を受けていたラージプート系ラートル(Rāthor)族の支配する小王国バグラナ(Baglāna)の中心の町であったが、グジャラート王国がムガル朝に併合されるとその保護を失った。この地方に送られたムガル軍の遠征活動が不発に終わると、バグラナの存続はなおしばらく黙認された。
- (8) 初版(1898年)中の擁護(khāṭirdārī)の表記は、第2版(1910年)および第6版(1947年)の表記では支持(ṭarafdārī)となっている。
- (9) 以下このパラグラフではアブル・ファズルが1人称で表現されている。アーザードが依拠している『アクバル・ナーマ』に強く影響されたためと思われるが、訳文では1人称表記を改めアブル・ファズルないし3人称代名詞で表記している。
- (10) このパラグラフは、アブル・ファズルとハーニ・ハーナーンとの関係が冷え切っていったことに関連してアーザードが述べた解説文である。文意を解するのは容易ではないが、恐らくこのような訳文の意であろう。
- (11) 『アクバル・ナーマ』ベンガル・アジア協会版テキストの治世第36年の条末尾に、このような内容の記述は見当たらない。アーザードがここで紹介しているのは『アクバル・ナーマ』の写本もしくはラクナウ版の注記かもしれないが、今のところ未確認である。
- (12) このパラグラフの内容は、『アクバル・ナーマ』第3巻最末尾の一部を引いたものである。*Akbar-nāma*, text, Vol. III, p. 802, English tr., Vol. III, p. 1201. アーザードはこのパラグラフでもアブル・ファズルを1人称で表記していた。
- (13) ジャハーンギール時代の歴史書。3部構成で、第2部がアクバル時代を扱う。
- (14) ブルハーンプルからアーグラに至る主要な道は、ここから東北に道を取ってハンディーア(Handīa)でナルマダー川を渡り、さらに東北の方向に進路を取るルートと、ブルハーンプルから西北に道を取って下流のアクバルプルでナルマダー川を渡り、マンドゥー(Mandū)、ウッジャインを経て迂回するルートとがあった。二つのルートは、古代の仏教遺跡サーンチーに程

近い東北方のビールサ(Bhīlsa 古代名Vidiśā)で合流し、北行してアーグラに至る。アブル・ファズルはブルハーンブルから西北回りの迂回ルートを取ってアーグラに帰還しようとしていた。

- (15) チャーンダがどこの地名であったか判然としない。同名の地名はいくつかあるが、いずれもウッジャインから非常に遠く離れている。
- (16) *Akbar-nāma*, text, Vol.Ⅲ, p. 811では確かにこのようになっているが、英訳者ベヴァリッジは注釈文中で、ヒジュラ暦1011年第1ラビー月4日(1602年8月12日木曜日)のこととしている。English tr., Vol.Ⅲ, p. 1201.
- (17) サラーエ・バラエはバルキー・サラーエー(Barkī Sarā'e)ともいう。この地もアントリーも、アーグラとブルハーンブルとを結ぶ大幹線道上のグワリャールとナルワル間に位置しており、グワリャールに程近い。またオンドチャ(オルチャ)からもさほど遠くは離れていない。
- (18) この半句中の「不信者」(bāghī)をアラビア文字の4文字で表記し、各文字が有する数値を合計すると1013となる。ところが項が刎ねられたのであるから冒頭の文字の数値2を差し引くと、アブル・ファズル謀殺の年のヒジュラ暦1011年となる。コーカルターシュ・ハーンのフルネームはムハンマド・アジーズ・コーカルターシュ(Muhammad 'Azīz Kokaltāsh)。アクバルの乳兄弟で、ハーン・アーザム(Khān A'zam 偉大なるハーンの意)の称号を有した重臣。1624年没。アブル・ファズル一家が迫害を受けて零落中、彼らはアクバルへの取りなしを彼に依頼して、何とか危機からの脱出を図ろうとした。この半句についての解説は、近藤治「シャイフ・ファリード・バックアリーのアブル・ファズル伝について」『西南アジア研究』第70号、2009年、97-110ページ参照。
- (19) この句のアラビア文字が表示する数値を合計すると、アブル・ファズル死去の年の数値1011に一致する。
- (20) アブル・ファズルのライバル、バダウーニーが家人以外には秘密にして『諸史選粹』を書き上げたことを踏まえている。
- (21) *Tūzuk-i Jahāngīrī*, ed. by Sayyid Ahmad, Aligarh, 1864, pp. 10-11, English tr., by A. Rogers and ed. by H. Beveridge, 2 vols., London, 1909-1914, reprint, Delhi, 1968, Vol. I, pp. 24-25; Wheeler M. Thackston(tr.), *The Jahangirnāma: Memoirs of Jahangir, Emperor of India*, New York, 1999, pp. 32-33.
- (22) フィリシュタ(1570ころ-1623ころ)の歴史書は*Gulshan-i Ibrāhīmī*(イブラーヒームの花園)または*Ta'rīkh-i Firishṭa*(天使の史書)と呼ばれる書で、ア

クバル没後の1607年ごろに成ったもの。テキストが手元にないので引用箇所の確認ができないが、英語版の該当箇所は次の通りである。*History of the Rise of the Mahomedan Power in India*, tr. by John Briggs, 4 vols., London, 1829, reprint, Calcutta, 1966-1971, Vol. II, p. 173.

- (23) デ・レート (Joannes De Laet 1593-1649) はオランダ東インド会社の取締役にもなった人物。彼が1631年にライデンから刊行したラテン語の *De Imperio Magni Mogolis* の英訳版 *The Empire of the Great Mogol: De Laet's description of India and fragments of Indian history*, tr. by J. S. Hoyland and annotated by S. N. Banerjee, Bombay, 1928, reprint, New Delhi, 1974, pp. 166-167 に、本文中で要約されているような内容が記されている。またその編年史部分をまとめた *A Contemporary Dutch Chronicle of Mughal*, by B. Narain and Sri R. Sharma, Calcutta, 1957, pp. 28-29 にも、同様の内容が記されている。ただしアーザードの『アクバル宮廷』はこれらの英書の刊行前に成った書であるので、彼がラテン語の原書に拠ったのか、それとも別の書に拠ったのか今のところ明らかではない。
- (24) アーグラ州南西部の州境に位置するナルワル (Narwar) 県の県都ナルワル。バルキー・サラヤーの南南西約30キロメートルにあり、アーグラとブルハーンプルを結ぶ大幹線道上に位置する。
- (25) マールワ州チャンデーリー県内にあってアーグラとブルハーンプルを結ぶ大幹線道上に位置する町。アーグラ州のナルワル県と隣接している。カラバーク (Kā la-bā gh) の名称で表示されることが多い。
- (26) 底本では āṭh kar sāṭh ho jā'e となっているが、第2版と第6版ではいずれも冒頭の āṭh が ūṭh となっているので、それらに拠ることにした。
- (27) この詩は Shaikh Farīd Bhakkārī, *Zakhī rat al-Khawā nī n*, ed. by Syed Moinul-Haq, 3 vols., Karachi, 1961-1974, Vol. I, p. 75 に収められている。近藤治前掲論文、p. 106 ページでも紹介している。
- (28) アブル・ファズルは1551年1月14日アーグラで生まれ、1602年8月12日殺害されたので、今日風の数え方では51年と約7ヵ月の寿命ということになる。しかしインドの伝統的な年齢の数え方では、日本の伝統的な数え年と同じように母体中の1年を加えるので、52歳ということになる。
- (29) ウルドゥー語の四行詩 (ルバーイー)。アーザードの作であろう。2行目にあるマジヌーンは、ペルシアの詩人ニザーミー・ガンジャヴィー (Nizāmī Ganjavī 12世紀半ば-13世紀初) の悲恋作品『ライラーとマジヌーン

- ン』の男性主人公名。
- (30) シーア派の一派。ラーフィジーは「離脱者」を意味し、シーア派系ザイド派からの離反者集団に起源をもつ。
- (31) マフディー (mahdī 救済主)の出現を主張する一派。インドでは、15世紀の後半に自らマフディーであることを主張したビハール地方ジャウンプル出身のムハンマド・ジャウンプリー (Muhammad Jaunpūrī)の信奉者たちが問題にされたことがあった。
- (32) この事件については、近藤治『ムガル朝インド史の研究』284-285ページで紹介されている。
- (33) イスラーム教徒が始業や書物開巻の辞として広く使用することはBismillā hi-rrahmā ni-rrahī mi (大慈大悲の神の御名にかけて、の意)の冒頭だけを抜き出して略記したもの。
- (34) 原語はTauzhizhのように読むことができるが、語末の文字は衍字で、しかもTauzhiはLauzhiの誤記とみなして老子と解した。
- (35) フダーは、John T. Platts, *A Dictionary of Urdū, Classical Hindī, and English*, Oxford, 1884, reprint, Oxford, 1960, p. 487によれば、古代ペルシア語qadhā i, qudhā i, パフラヴィー語khotā i, アヴェスタ語qadhātaに由来する語であり、サンスクリット語に対応語を求めるとsva+dhitaとなる。svaは「自ら」の意、dhitaは√dhā「置く、創造する」の過去受動分詞。両者が合成されると「自ら置かれた」「自ら創造された」の意となる。
- (36) ヒンディー語のバドラーは服喪のために近親者たちが頭髮やひげを剃ること。ヒンドゥー教徒、とりわけラージプート人たちの間でこの風習は定着していた。彼らは平生でも、ひげは口髭だけを残す習慣があり、アクバルもある時からこの習慣を守っていた。
- (37) マリヤム・マカーニーはアクバルの生母ハミーダ・バーノー・ベীগム (Hamīda Bāno Begam)の諡号。1603年9月没。「亡くなったかの女性」(ān-ke mar gaī)とは、サリームの第一夫人で長子フスローの生母であったシャー・ベীগム (Shāh Begam)であるように思われる。彼女はラージプート出身の廷臣バグワーン・ダース (Bhagwān Dās)の女にしてマーン・シング (Mān Singh)の義妹であったが、夫と息子の反目に苦しみ、夫の冷遇に悲嘆して同じく1603年の初期に服毒して自死した。
- (38) 『バーブル・ナーマ』のよると、罰則として鬚(あごひげ)を剃る習慣があった。間野英二訳注『バーブル・ナーマ』松香堂、1998年、380ページ。

Annette S. Beveridge (tr.), *Bābur-nāma (Memoirs of Bābur)*, 2 vols., London, 1922, reprint in one volume, London, 1969, New Delhi, 1970, p. 404. またバーブル自身頭髪を剃る習慣があった。間野英二訳注、575ページ。この箇所に対応する訳注において、アネット・ベヴァリッジも剃髪が中央アジアでしばしば見られる共通の習慣であったことを指摘している。 *Ibid.*, p. 649, n. 8.

- (39) フェルドウシーの『シャー・ナーメ』に登場する古代ペルシアの王ファリードゥーン (Farīdūn) の末の王子。ここでは、アクバルの末の皇子ダーニヤールに懸けて書かれている。
- (40) シャイフ・シブリー (Shaikh Shiblī) はバグダード生まれのスーフィーで、945年没。40歳のときにイスラーム神秘主義に転じた。ジュナイド・バグダーディー (Junaid Baghdādī) もバグダード生まれのスーフィーで、910年没。シブリーは彼の晩年の弟子であった。後世のイスラーム神秘主義に多大の影響を与えた。ここでは上の文章を受けて、プラトンと同じように彼ら2人が今もし仮に生きていたならば、アブル・ファズルを賞賛したことであろう、と述べているのである。
- (41) この対句はウルドゥー語で書かれているが、ペルシア語的表現が多く用いられている。この詩の直前で「私アーザードはさらに何を語ればよいのか」と述べているが、この詩はそれを受けたもの。「知恵の水」(ā b-e guhar) は「真珠の水」「真珠を含む水」の意でもあり、第1句に懸けられている。
- (42) アブル・ファズルとはほぼ同時代のカーディリー派のスーフィー聖者 (1553-1615)。以下の記述とよく似た記述は、シャイフ・ファリード・バッカリーのアブル・ファズル伝のなかに出てくる。注(18)で掲げた近藤論文の特に107ページを参照。
- (43) この対句の原文はペルシア語がそのまま引かれている。但しシャイフ・ファリード・バッカリーのテキスト第2句中の表現「御身の慈愛によって」にある「御身」に相当する語(khud)はアーザードの文中にはない。
- (44) シャイフ・ファリード・バッカリーの著したこの書については、近藤前掲論文参照。
- (45) アブル・ファズルの托鉢僧詣でや、口癖にした言葉、嘆息癖については、近藤前掲論文、104ページも参照。
- (46) 底本も他の2種の刊本も、この訳語に当たる原語がrahmatと記されているが、それでは意をなさないのでrahmatに置き換えて訳出した。
- (47) この四行詩はアクバルの統治を讃えたもの。七種の鉱物は金・銀等の貴

金属とダイヤモンド・ルビー等の宝石を合わせた財宝を意味し、四種の要素はインドの4つの主要宗教、あるいは四姓をさしていると解される。

- (48) 上記の「私が目にする欽定の卓越館」以下この詩に至る文章は、全文がペルシア語で書かれている。アブル・ファズルの書からの引用と考えられるが、出典の確定はまだできていない。
- (49) イギリス人学者のH. Blochmannをさす。『アクバル会典』ペルシア語版の校訂者、英語版第1巻の翻訳者として著名。
- (50) ムッラー・サーヒブには「学匠先生」の意の他に、融通のつかぬイスラム学者をさす「頑迷先生」「お偉方先生」の意もあるが、ここではシャイフ・アブドゥルカーディル・バダーウーニー (Shaikh 'Abd al-Qādir Badā'ūnī) をさしている。ファイジーやアブル・ファズルの穏健で自由主義的な宗教観に対して、バダーウーニーはイスラム教の厳格な正統主義的宗教観に立脚していた。アーザードは『アクバル宮廷』中のバダーウーニーを扱ったところ、すなわち底本419-463ページ、およびその他のところにおいて、バダーウーニーをしばしばムッラー・サーヒブと表記している。本文中の「歴史書」とはバダーウーニーの著 *Muntakhab al-Tawā rī kh* (諸史選粹) をさしている。
- (51) アーザードは、この文章以下パラグラフ末尾に至るまでの叙述をバダーウーニーの次の記述に拠っている。'Abd al-Qādir Badā'ūnī, *Muntakhab al-Tawā rī kh*, ed. by W. N. Lees and Ahmad Ali, 3 vols., Calcutta, 1865-1869, Vol. III, pp. 136-137, English tr., Vol. III, by T. W. Haig, Calcutta, 1925, reprint, New Delhi, 1990, pp. 192-193. シャイフ・ハサン・マウシリーは先祖がイラクのモスル (Mausil) の出身。アクバルがカーブルを制圧したときムガル朝宮廷に仕え、若いサリームの家庭教師となった。後に勤仕を辞し、アクバルの重臣ホージャ・ニザームッディーン・アフマドと親交を結んだ。
- (52) アクバル宮廷の著名な学者。アクバルの治世第26年(1581年)に帝国の課税長官 (amīn al-mulk) に就任したことがある。
- (53) 1581年8月アクバルがカーブルに入城し、異母弟ミールザー・ハキームの反逆を鎮圧したことをさす。
- (54) 原文は、Mumkin nahī ŋ ke ṭabī'at meṇ thakan ma'lūm ho.
- (55) 著者はアクバル時代の文人。彼は1594年ごろに書き上げたこの書のかで、世界を七つの気候帯に分けて地政学的特徴を述べ、各地域の著名人の伝記を記している。cf. Henry George Keene, *An Oriental Biographical*

Dictionary: Founded on materials collected by the late Thomas William Beale, 2nd edition, London, 1894, reprint, Lahore, n. d., p. 70.

- (56) 例えば、最も広く普及しているカルカッタのベンガル・アジア協会刊の刊本 *Akbar-nā ma*, 3 vols., ed. by Āghā Aḥmad 'Alī and Maulwī 'Abd al-Raḥīm, Calcutta, 1877, 1879, 1886では、第1巻がアクバル登極まで、第2巻がアクバル治世第17年末まで、第3巻がアクバル治世第18年初からアクバル最晩年までの記述を行なっている。
- (57) 『アクバル・ナーマ』第2巻は、ここに記されているように治世元年から同第17年、すなわちアクバル30歳までの記述を行なっている。アブル・ファズルがもともと抱いていた『アクバル・ナーマ』の大構想では、アクバルの事跡をその生誕から30年毎に区切ってそれぞれの期間を1巻ずつの書にまとめ上げるというものであった。これでいくと、通普及版の第1巻と第2巻は合して大構想の第1巻を構成し、普及版の第3巻が大構想の第2巻に相当するもの、ということになる。そしてアクバル時代の制度集成『アクバル会典』が大構想の第3巻に位置づけられていた。『アクバル会典』は『アクバル・ナーマ』の第3巻に相当する、といわれることがあるのはこの意味における謂をさしたものである。
- (58) 底本をはじめいずれの刊本もヒジュラ暦1110年としているが、これは明らかにヒジュラ暦1010年の間違いである。
- (59) Mountstuart Elphinstone (1779-1859)。ボンベイ管区知事在任中にライヤーヤットワーリー制の地稅制度を導入したイギリス人のインド植民地官僚。*The History of India*, 2 vols. (London, 1841)の著者としてもよく知られている。
- (60) アブル・ファズル謀殺後の『アクバル・ナーマ』増補部分の執筆者については、この原注でアーザードが述べているようにイナーヤトウッラーとする説とムハンマド・サーリフとする説とがある。両者の関係については同一人物とする考え方もあるが、兄弟であるとする考え方が今日有力になっている。この兄弟説は、『アクバル・ナーマ』英訳者ヘンリー・ベヴァリッジがその第3巻最末尾に付した補注(同書、1204-1205ページ)において、イナーヤトウッラーはムハンマド・サーリフの恐らく兄であったであろうとの推測を示していた。この推測は、その後W. E. Begley and Z. A. Desai (eds.), *The Shah Jahan Nama of 'Inayat Khan*, Delhi, 1990, Introduction, pp. xxviii-xxixに受け継がれ、さらにA. S. Bazmee Ansari, "Ināyat Allāh Kanbū", *The Encyclopaedia of Islam*, new edition, vol. III, pp. 1203-1204へと至り、『アクバル・

ナーマ』増補者は兄の方のイナーヤトゥッラーで、弟のムハンマド・サーリフはシャージャハーン時代の大冊の歴史書‘*Amal-i Ṣāliḥ*’（別名*Shāhjahān-nāma*）の著者とする考え方が定着しつつある。

- (61) 17世紀インドの文人アブドゥルラティーフ・アッバーシー（‘Abd al-Laṭīf ‘Abbāsī）か。彼にはガズナ朝時代の著名なペルシア詩人サナーイーの詩集の評釈がある。
- (62) 17世紀ペルシアの文人政治家、詩人。サファヴィー朝アッバース2世時代（1642-1666）に宮廷史家となり、次のスライマーン時代（1666-1694）に宰相を務めた。
- (63) 以下このパラグラフは、『アクバル・ナーマ』治世第18年の記述冒頭部の引用である。引用はペルシア語原文がそのまま引かれている。引用にはいくつかの誤記が見られるが、ベンガル・アジア協会刊のカルカッタ版によって訂正しながら訳出した。*Akbar-nā ma*, Vol. III, ed. by Maulawī ‘Abd al-Raḥīm, Calcutta, 1886, pp. 31-32. ただし原文中の各2半句5行の詩は各2半句2行のみの引用となっている。
- (64) アクバル時代、太陽が黄道上の白羊宮に入る日すなわち春分の日をもって新年の元日とされた。当時のユリウス暦（旧暦）では、春分の日は1582年10月採用のグレゴリウス暦（新暦）とは異なり3月11日となるが多かった。アクバル時代の各治世年は、このペルシア式太陽暦の元日をもって開始されるものとされた。ただし、新しい一日は太陰暦のヒジュラ暦同様に月の出をもって始まるとされていたので、本文の記述の如く元旦の開始は夕方ないし夜にくることとなったのである。
- (65) このパラグラフは『アクバル・ナーマ』治世第22年の記述冒頭部から引用。*Akbar-nā ma*, text, III, p. 200.
- (66) ムルターン州東北部のパンジャブ州境に位置する県、およびその中心城市の名称。
- (67) 紀元後3世紀にサーサーン朝ペルシアにおいてマニ教を創始した宗教家。ゾロアスター教・仏教・キリスト教などの諸要素を取り入れた善悪二元論を説く。
- (68) Abū ‘Alī Sīnā. 中央アジア、ブハラ出身の高名な哲学者（980-1037）。中世ヨーロッパの哲学や医学に多大な影響を与えた。ラテン名アヴィケンナ（Avicenna）。
- (69) このパラグラフは『アクバル・ナーマ』治世第26年の記述冒頭部からの引用。

Akbar-nā ma, text, III, p. 347.

- (70) 「形相と資料の世界」以下「神の威光」までに至る長い表現は、太陽をさしている。

- (71) このパラグラフは『アクバル・ナーマ』治世第29年の記述冒頭部からの引用。

Akbar-nā ma, text, III, p. 431.

- (72) ペルシア暦の11月で、西暦(旧暦)の1月11日-2月9日に相当する。

- (73) ペルシア暦の12月で、西暦(旧暦)の2月10日-3月10日に相当する。

- (74) 底本をはじめとするウルドゥー語刊本はいずれも旅宿(*manzil-gāh*)としているが、ここはカルカッタ版ペルシア語テキストに拠った。

- (75) いろいろな表現によって言い換えが自在にできる文章の達人をいう。

- (76) 1564年末ごろ、アクバルはアークラの南方7マイルに位置するカクラリー (*Kakrālī*) 村に狩猟等遊興用のための離宮を築き、ここを中心にして形成された小都市がナガルチーンである。高官たちにも別荘の建設が奨励された。ナガルチーンは「平安の地」の意で、アクバルが命名したもの。数年後にアークラの西方約40キロメートルのところに新都ファテブル・シークリーが建設されると、この小都市は放棄され、アクバル末期に消滅した。Vincent A. Smith, *Akbar the Great Mogul, 1542-1605*, 2nd edition, Oxford, 1919, pp. 75-76; *The Cambridge History of India*, Vol. IV, ed. by Richard Burn, Cambridge, 1937, p. 89を参照。アブル・ファズルは『アクバル・ナーマ』のなかで、ナガルチーンについて次のように記している。「このため皇帝は、卓越した村カクラリーを美しく飾ることに注意を向けた。…そこから都アークラまでは1ファルサング(*farsang* ペルシア里、3~4マイル)の道のりである」(*Akbar-nā ma*, text, II, p. 236)。「皇帝はこの名勝の地をナガルチーンすなわち平安の町(*shahr-i ārāmish u āsūdagi*)と命名した」(*Ibid.*, p. 237)。

- (77) 鋭敏な識別力がなければ、の意。

- (78) どの刊本も *rūhī* となっているが、それでは意をなさないので *rūhī* (魂) に改めて訳した。

- (79) アーザードはこのように注記したあと、これに続けてバダーウニーのナガルチーンに関する記述を『諸史選粹』からペルシア語原文そのまま長々と引用している。その引用箇所は *Muntakhab al-Tawārīkh*, text, II, pp. 69-70 である。このテキストによってアーザードの引用文中の誤記も訂正した。

- (80) 原文ではカクロリー (*Kakrolī*) とも読める。アブル・ファズルは上記注(76)で紹介した如く『アクバル・ナーマ』中でカクラリーと表記しており、

この地名表記法が多く用いられている。

- (81) ここまでがバダーウーニーの長いベルシア語の引用文である。
- (82) アーサフ・ハーンの称号を有した人物は少なくなかったが、恐らくアクバル時代の重臣アブドゥルマジード・アーサフ・ハーン (‘Abd al-Majīd Āṣaf Khān) であろう。
- (83) アクバル時代にムガル朝に仕えた、フェルガーナ地方出身のジャーニー・クルバーニー・クリーチ・ハーン (Jānī Kurbānī Qulīch Khān) であろうか。
- (84) バダーウーニーの大著『諸史選粹』の叙述全体を大河に見立てている。バダーウーニーはこの書の途中からアブル・ファズルさらにはアクバルに對してまで辛辣な批判を行なっているが、はじめのうちはそうではなかった。
- (85) このパラグラフは、アーザードが極端な比喩的手法を用いて述べているので、意をなすようにかなり言葉を補って訳している。
- (86) アーザードはアブル・ファズルのいう小世界に *yangī dunyā* なる注を付けている。*yangī* は *Yankee* を写したものと考えられるから、これは「アメリカ世界」の意であろう。アブル・ファズルは『アクバル会典』のなかで次のように述べている。「最近、ヨーロッパ人は非常に広大で人口の多い島を南の方で奪い取り、それを新世界 (*‘ālam-i nau*) と名付けた」。 *Ā’īn-i Akbarī*, text, ed. by H. Blochmann, Vol. II, Calcutta, 1877, p. 26.
- (87) ここに「博学の士」と訳した原語は *mullā ṣaḥīb* であって、この2語がアブル・ファズルをさすことは間違いない。従ってアーザードの用法では、ムッラー・サーヒブが唯一バダーウーニーをさしているとは限らないようだ。
- (88) 「新世界」についてのもっと詳しい記述を断念してしまった、の意。
- (89) この語の後に接続詞 *aur* (〜と) および *RDYRF* の2語が続くが、7文字から成るこの語が特定できないので、これら2語は省略して訳出すこととした。
- (90) この対句は、『アクバル会典』の結語の末尾に付されている。 *Ā’īn-i Akbarī*, text, II, p. 283.
- (91) シャージャハーン治下で中央政府の管財長官 (*mīr-sāmān*) を1643年から、これに続けて財務長官 (*dīwān-i kull*) を1646年から死去の年(1656)まで勤めた重臣。名文家でもあった。
- (92) 1654年に成った2巻本のこの書は、通例『パードシャー・ナーマ』 (*Pādshāh-nāma*) と称される。第3巻は彼の弟子ムハンマド・ワーリス (*Muḥammad Wāris*) が執筆した。
- (93) シャージャハーンの命によって宮廷内で催されたバーザール。皇族や高

官の夫人たちが着飾ってさまざまな品を売り、皇帝はそのバーザールの散策を楽しんだ。皇帝と夫人たちとのハブニングもおこった。ミーナーは楽園の意。

- (94) ここに記されているように、『アッラーミー書簡集』(*Mukātabāt-i 'Allāmī*) は別名『アブル・ファズル名文集』(*Inshā-yi Abū'l-Faẓl*)とも称され、アブル・ファズルの甥で義理の息子でもあったアブドゥルサマド・ムハンマド (ʿAbd al-Ṣamad ibn Afẓal Muḥammad) がアブル・ファズルの死後数年を経たヒジュラ暦1015年(1606/1607)に収集、刊行したものである。アッラーミー (ʿallāmī) は「我が大学者」の意で、アクバルがアブル・ファズルに与えた呼称。この書の版本としては、古くは1810年刊のカルカッタ版をはじめとして現在まで多数世に出ているようであるが、次のものがよく知られている。*Mukātabāt-i 'Allāmī Abū'l-Faẓl*, ed. with marginal notes by Muḥammad Hādī 'Alī, Lucknow, 1863 (1st edition, 1846). またこの書の各巻から精選したものにウルドゥー語の対訳を配して編んだ次の書もある。*Muntakhabāt-e Harsih Daftar-e Abū'l-Faẓl*, ed. by Maqbūl Aḥmad Gopāmūṭī, Lucknow, 1846, Lahore, 1861. これら2書の確認には、ロンドン大学東洋アフリカ学部図書館蔵本を利用させていただいた。この書の英語版としては3巻全訳のものはないが、第1巻のみを英訳しこれに詳しいコメントと注記を付した次の書がある。Mansura Haidar, *Mukātabāt-i 'Allāmī (Inshā'i Abū'l-Faẓl) Daftar I*, New Delhi, 1998. 全巻のウルドゥー語版としてはアラーハーバードから1861年に刊行された *Mukātabāt-e Abū'l-Faẓl* がある。
- (95) アクバルと同時代の中央アジアのシャイバーン朝君主(在位1583-1598)。
- (96) 18世紀末ごろに成ったアクバル時代史。第1巻はアクバルの治世第24年末(1580)までの歴史で、この巻のみが現存する。主として『アクバル・ナーマ』に依拠。著者はイギリス東インド会社の参与ともなったイスラーム学者。1802年没。
- (97) 古代インドの『パンチャタントラ』を中心にした寓話集が6世紀のサーサーン朝下で中世ペルシア語に訳され、それをもとにして8世紀に『カリラとディムナ』の題でアラビア語訳がなされた。近世ペルシア語訳は、12世紀にこのアラビア語訳をもとにして行なわれた。アブル・ファズルはアクバルの命を受けて近世ペルシア語訳の改訂を行い、これに『イヤーリ・ダーニシュ』(*ʿIyārī Dānish* 知恵の試金石)なる題を付した。菊地淑子訳『カリラとディムナーアラビアの寓話』平凡社東洋文庫、1978年の解説、および

Ā'īn-i Akbarī, text, Vol. I, p. 116, English tr., Vol. I, p. 106参照。

- (98) フサイン・ワーズが『カリラとディムナ』のペルシア語訳版に付した書名。スハイル(Suhail)はアルゴー座の主星カノープスをさす。書名は『カノープスの輝き』の意。
- (99) バダーウーニーがこのような内容のことをどこで述べているのか、今のところ判然としない。
- (100) *Ruq'āt-i Abu'l-Faẓl*. 「アブル・ファズル書簡集」の意。私が閲覧したのはこの書の次の3種の刊本で、いずれも旧インド省図書資料館(India Office Library and Records 現在は大英図書館に移管)に所蔵されていたものである。一つは*Ruq'āt-i Abu'l-Faẓl*, Calcutta, A.H.1238 (1822), 63pp. これは明らかに抜粋版である。二つ目は*Ruq'āt-i Abu'l-Faẓl*, Cawnpore, 1876, lithographical, 134pp. これはdaftar (巻)に分けられていない。三つ目は*Ruq'āt-i Abu'l-Faẓl*, with Urdu preface and glossary by Jalāl al-Dīn Aḥmad Ja'farī, Allahabad, 1929, lithographical, 266+101pp. この方は、アブル・ファズルがアクバルに代わって書いた貴顕や王侯宛ての書簡および勅令を取めた第1巻と、アブル・ファズル自身がアクバルや皇子たち、貴顕たち宛てに書いた書簡を取めた第2巻とから成り立っている。この三つ目の書は、書名こそ*Ruq'āt-i Abu'l-Faẓl*となっているが、実は*Mukātabāt-i 'Allāmī*の第1巻と第2巻を取り出して印刷したものに外ならない。
- (101) アラブ人のスーフィー聖者アブー・ヤジード・アルビスターミー (Abū Yazīd al-Bisṭāmī)。870年代に没。彼はジュナイドの師匠筋に当たる。
- (102) Saiyid Athar Abbas Rizvi, *Religious and Intellectual History of the Muslims in Akbar's Reign, With special reference to Abu'l Faẓl (1556-1605)*, New Delhi, 1975, pp. 499-500, 507によると、*Mukātabāt-i 'Allāmī*の第4巻(daftar)と考えられていたものは、実は単行書と目されてきた*Ruq'āt-i Abu'l-Faẓl*に外ならない。しかも*Ruq'āt-i Abu'l-Faẓl*の内容をよく検討してみると、これはアブル・ファズルその人の書いた書簡集ではなく、彼に擬して別人が書いた偽書である、と主張する。
- (103) Irfan Habib, *Man and Environment: The ecological history of India*, A People's History of India 36, New Delhi, 2010, p.141.
- (104) *Fehrist-e Makhtūṭāt-e Āzād*, ed. by 'Ārif Naushāhī and Muḥammad Ikrām Chaghataī, Lahore : Punjab University Oriental College, 2010 ; *Lughat-e Āzād* (Urdu-Fārsī), re-edited by Mo'īn Nizāmī, Lahore : Punjab University Oriental College, 2010.